

旭・小島古墳群

— 前の山古墳 —

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ

2001

本庄市教育委員会

序

本庄市の歴史は非常に古く、江戸時代には中山道の中心的な宿場町として大いに繁栄したことでよく知られていますが、中世には武蔵の有力武士団のひとつであった児玉党の蟠踞するところであり、古代には条里水田が広く整備され、重要な食料生産基盤としての役割を果たしていました。そうした歴史的背景をもつ本庄市は埋蔵文化財にもめぐまれ、本庄台地を中心に旧石器時代から近世まで時代幅も広く、多くの重要な遺跡が分布しています。

本書に報告する旭・小島古墳群も、4世紀代の小型方形墳の形成にはじまり、7世紀代の群集墳の築造に至るまで、300年以上にわたって造営された県内有数規模の古墳群として知られています。本庄市教育委員会では、この旭・小島古墳群の重要性を考慮し、平成元年以来、小島西土地区画整理事業に伴う記録保存の調査に努めてまいりました。とりわけ、平成10・11年度に実施された、前の山古墳の調査では、ほぼ完全に復原された盾持人物埴輪をはじめ多数の形象埴輪や円筒埴輪が検出されました。また、石室内部からは、色とりどりのガラス玉や金銅製の耳環が出土するなど古墳時代の風俗や工芸技術を解明するうえで数多くの貴重な資料を得ることができました。とくに、3点の盾持人物埴輪は口を開けて笑う表情や、真ん丸な目、大きな耳など個性的な顔立ちによって人々の注目を誘い、すでに数々の展示会に出品の実績を重ねています。

今後は、本書が学術研究をはじめ、さまざまな教育活動、生涯学習の場に広く活用されるとともに、将来の埋蔵文化財保護に資することを希望する次第です。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導、ご教示を賜りました方々、現地調査にご協力いただいた小島地区の皆様と土地区画整理事業関係の各位に心よりの御礼を申し上げます。

平成13年3月

本庄市教育委員会
教育長 福 島 巖



前の山古墳出土土器持人物埴輪

本庄市埋蔵文化財調査報告 第23集

旭・小島古墳群

— 前の山古墳 —

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 I

2001

本庄市教育委員会

例 言

1. 本書は埼玉県本庄市小島3丁目7番1,674他に所在する旭・小島古墳群前の山古墳の発掘調査報告書である。
2. 調査は、本庄市小島西土地区画整理事業にともない、事前の記録保存を目的として、本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 調査は旭・小島古墳群前の山古墳の墳丘ならびに周堀964㎡を対象として実施した。
4. 調査順次は、道路建設にともない平成2年度に実施した調査を1次調査とし、宅地造成工事にともない平成10・11年度に実施した調査を2次調査とした。
5. 発掘調査期間は以下のとおりである。

A地点（第1次調査）	自	平成2年5月25日	至	平成2年6月25日
B地点（第2次調査）	自	平成10年11月4日	至	平成11年5月31日
6. 発掘調査担当者は以下のとおりである。

A地点（第1次調査）	本庄市教育委員会社会教育課	長谷川勇
B地点（第2次調査）	本庄市教育委員会社会教育課	増田一裕
7. 整理調査期間は以下のとおりである。

自 平成11年6月1日 至 平成13年1月31日
8. 整理調査担当者は以下のとおりである。

本庄市教育委員会社会教育課 増田一裕
9. 本書の執筆・編集担当者は以下のとおりである。

本庄市教育委員会社会教育課 太田博之
10. 本書に掲載した発掘現場写真の撮影は各発掘調査担当者が行なった。
11. 本書に掲載した遺構および遺物出土状況図は増田が作成し、太田が加除筆を行なった。
12. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。
13. 発掘調査から整理、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜った。ご芳名を記し感謝申し上げます。(順不同・敬称略)

秋元 陽光 新井 端 石橋 充 稲村 繁 犬木 努 井上 裕一 入澤 雪絵 内山 敏行
江原 昌俊 大谷 徹 賀来 孝代 加藤 一郎 風間 栄一 加部 二生 車崎 正彦 小林 修
坂本 和俊 佐々木 幹雄 島田 孝雄 志村 哲 杉山 晋作 清喜 裕二 滝沢 誠 鳥羽 政之
長井 正欣 中里 正恵 日高 慎 山崎 武 若狭 徹 大熊 季広 鈴木 徳雄 外尾 常人
恋河 内昭彦 金子 彰男 田村 誠 徳山 寿樹 長瀬 歳康 松澤 浩一 丸山 修 矢内 勲

14. 前の山古墳の発掘調査、整理調査および報告書の編集・刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

・平成2年度 A地点発掘調査（第1次調査）

教 育 長 坂本 敬 信
〈本庄市教育委員会事務局〉
事 務 局 長 金井 善 一
参 事 宮本 清
社会教育課長 坂上 英 夫
同 課長補佐 中島 正 和
同 吉田 敬 一
文化財保護係
係 長 長谷川 勇
主 任 増田 一 裕
主 事 太田 博 之
主 事 赤尾 直 行
調査担当者
文化財保護係
係 長 長谷川 勇

・平成12年度 整理調査および報告書刊行

教 育 長 福島 巖
〈本庄市教育委員会事務局〉
事 務 局 長 倉林 進
社会教育課長 阿部 均
同 課長補佐 福島 保 雄
文化財保護係
係 長 増田 一 裕
主 任 町田 浩 子
主 任 太田 博 之
臨 時 職 員 松本 完
調査担当者
文化財保護係
主 任 太田 博 之

・平成10・11年度 B地点発掘調査（第2次調査）

教 育 長 塩原 暁（平成10年度）
福島 巖（平成11年度）
〈本庄市教育委員会事務局〉
事 務 局 長 渡辺 正 彦
社会教育課長 恩田 高 治（平成10年度）
阿部 均（平成11年度）
同 課長補佐 中村 文 男
文化財保護係
係 長 増田 一 裕
主 査 関根 君 江（平成10年度）
主 任 町田 浩 子（平成11年度）
主 任 太田 博 之
調査担当者
文化財保護係
係 長 増田 一 裕

凡 例

1. 本書所収の遺跡全体図におけるX・Y座標値は国土標準座標第IX系に基づく。
2. 各遺構における方位針は座標北を示す。
3. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に以下のとおりである。

[遺構図]

- 墳丘測量図… 1/160
- 墳丘立面・断面図… 1/40
- 土層・遺構断面図… 1/40

[遺物実測図・拓影図]

- 埴輪… 1/5
- 須恵器… 1/4
- 土師器… 1/4
- 玉類… 1/1
- 耳環… 1/1

その他のものについては、個別にスケールを示した。

4. 本書の本文中および観察表で用いた円筒埴輪の各部名称は、突帯を下から上に向かって順に第1突帯、第2突帯、第3突帯とし、各段を基部の側から口縁部に向かって順に第1段、第2段、第3段……とした。
5. 円筒埴輪観察表の「底部・巻き」の「左・右」は、基部を成形する粘土板の巻き合わせの方向を示し、製作者側（上）からみて左端を上に乗せたものを「右」、右端を上に乗せたものを「左」とした。
6. 円筒埴輪観察表の「底部・圧痕」の「棒状」、「木目状」等の記載はあくまでも視覚的な分類によるものである。
7. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
8. 遺構断面図のスクリーントーンは地山のローム層を示す。
9. 観察表中の遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修の新版「標準土色帖」2000年版によった。
10. 本書で使用した地形図は国土地理院発行1/50,000「高崎」に加筆したものをを用いた。
11. 本書で使用した位置図は本庄市発行「本庄市都市計画図6」1/2,500に加筆したものをを用いた。
12. 本書の引用・参考文献は巻末に一括して記載した。

目 次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
3 旭・小島古墳群の概要	6
III 調査の方法と経過	
1 A地点(第1次調査)	10
2 B地点(第2次調査)	10
IV 調査の成果	
1 遺 構	
(1) 墳 丘	12
a. 調査前の状況 b. 墳丘の構造	
(2) 周 堀	21
a. A地点 b. B地点	
(3) 埋葬施設	22
a. 攪乱坑 b. 玄室 c. 羨道 d. 前庭部 e. 基盤の構造	
2 遺 物	
(1) 副葬遺物	28
a. 遺物の出土状況 b. ガラス玉 c. 耳環	
(2) 墳丘出土遺物	28
a. 遺物の出土状況 b. 埴輪 c. 土器	
(3) 墳丘下出土遺物	58
a. 遺物の出土状況 b. 土器	
V 結 語	62

引用・参考文献

写真

挿図目次

図1	周辺の遺跡	3
図2	旭・小島古墳群分布図	7・8
図3	調査区位置図	11
図4	前の山古墳墳丘測量図	13・14
図5	前の山古墳全体図	15・16
図6	石室開口部方向墳丘立面図	17・18
図7	南北・東西墳丘断面図	19・20
図8	前の山古墳A地点土層断面図	21
図9	前の山古墳B地点周堀断面図	22
図10	石室および石室基盤構造平面図	23・24
図11	石室前庭部平面・立面図	25・26
図12	石室出土遺物実測図	29
図13	前庭部周辺遺物出土位置図	30
図14	円筒埴輪実測図(1)	32
図15	円筒埴輪実測図・拓影図(2)	33
図16	円筒埴輪拓影図(3)	34
図17	円筒・朝顔形埴輪実測図・拓影図(4)	35
図18	朝顔形埴輪実測図・拓影図(5)	36
図19	形象埴輪実測図(1)	41
図20	形象埴輪実測図(2)	42
図21	形象埴輪実測図(3-1)	43
図22	形象埴輪実測図(3-2)	44
図23	形象埴輪実測図(3-3)	45
図24	形象埴輪実測図(4-1)	46
図25	形象埴輪実測図(4-2)	47
図26	形象埴輪実測図(4-3)	48
図27	形象埴輪実測図(5-1)	49
図28	形象埴輪実測図(5-2)	50
図29	形象埴輪実測図(6)	51
図30	形象埴輪実測図(7-1)	52
図31	形象埴輪実測図(7-2)	53
図32	形象埴輪実測図(7-3)	54
図33	形象埴輪実測図(8)	55
図34	形象埴輪拓影図(9)	56
図35	形象埴輪拓影図(10)	57
図36	墳丘出土土器実測図	59
図37	墳丘下遺物出土位置図	60
図38	墳丘下出土土器実測図	61

写真目次

- 写真1 前の山古墳A地点 調査時の墳丘
前の山古墳A地点 調査区全景〔北から〕
前の山古墳A地点 周堀検出状況〔西から〕
- 写真2 前の山古墳A地点 周堀検出状況〔東から〕
前の山古墳A地点 周堀検出状況〔南から〕
前の山古墳A地点 周堀検出状況〔南から〕
- 写真3 前の山古墳B地点 墳丘南西側葺石の露出状況
前の山古墳B地点 墳丘西側葺石の露出状況
前の山古墳B地点 表土除去後の状態
- 写真4 前の山古墳B地点 前庭部・葺石検出状況
前の山古墳B地点 墳丘裁割後の状況
前の山古墳B地点 墳丘西側盛土検出状況
- 写真5 前の山古墳B地点 墳丘東側盛土検出状況
前の山古墳B地点 墳丘北側盛土検出状況
前の山古墳B地点 石室基盤検出状況
- 写真6 前の山古墳B地点 盾持人物埴輪16台部検出状況
前の山古墳B地点 盾持人物埴輪16台部検出状況
前の山古墳B地点 盾持人物埴輪15台部検出状況
- 写真7 前の山古墳B地点 盾持人物埴輪15頭部検出状況
前の山古墳B地点 前庭部フラスコ形長頸壺検出状況
前の山古墳B地点 墳丘下土師器検出状況
- 写真8 円筒埴輪 1～9
- 写真9 円筒埴輪 10～22
- 写真10 円筒埴輪 23～39
- 写真11 円筒・朝顔形埴輪 40～52
- 写真12 朝顔形埴輪 53・54
家形埴輪 10・11
蓋形埴輪 12
大刀形埴輪 13・14
- 写真13 盾持人物埴輪15
盾持人物埴輪15・頭部〔正面〕
盾持人物埴輪15・頭部〔左側面〕
盾持人物埴輪15・頭部〔後面〕
盾持人物埴輪15・頭部〔右側面〕
- 写真14 盾持人物埴輪15・緒〔後面〕
盾持人物埴輪15・顔〔側面〕
盾持人物埴輪15・耳孔
盾持人物埴輪15・鼻〔側面〕
盾持人物埴輪15・鼻〔下面〕
盾持人物埴輪15・口〔正面〕
盾持人物埴輪15・口〔側面〕
盾持人物埴輪15・頸
- 写真15 盾持人物埴輪16
盾持人物埴輪16・顔
盾持人物埴輪16・鼻
盾持人物埴輪17
- 写真16 盾持人物埴輪17・鼻
盾持人物埴輪17・口
盾持人物埴輪18～20
女子人物埴輪21・髻
- 写真17 女子人物埴輪21
女子人物埴輪21・耳玉、耳環〔右側面〕
女子人物埴輪21・耳玉、耳環〔左側面〕
女子人物埴輪21・帯
女子人物埴輪21・頸玉
- 写真18 墳丘出土土器 3・4
墳丘下出土土器 1～4・9・10・14・15

I 調査に至る経過

昭和63年織茂良平本庄市長から、市内小島地区において「小島西土地区画整理事業」の計画があり、これに関係する「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の協議の申し入れが本庄市教育委員会に出された。本庄市長から協議のあった「小島西土地区画整理事業計画」は、本庄市大字小島、下野堂、万年寺地区におよぶ大規模なものであり、道路、下水道の整備計画域も広範であることから、当該事業地に埋蔵文化財が存在する場合、相当程度の影響が及ぶことが予測された。本庄市教育委員会事務局では、これを受けて、埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、当該開発計画予定地における埋蔵文化財包蔵地の所在を確認した。その結果、同地には埼玉県選定重要遺跡である旭・小島古墳群（53-171）の所在することが判明した。

本庄市教育委員会では、このような状況を踏まえ、ただちに旭・小島古墳群の保存について本庄市と協議を開始した。その結果、本庄市教育委員会教育長と本庄市長との間で、旭・小島古墳群の保存に関する「本庄都市計画事業小島西土地区画整理事業地内埋蔵文化財に関する協定書」が締結され、1) 事業施行区域は埼玉県選定重要遺跡の範囲内であることから、現在墳丘を有する古墳のみならず事業区全域を協議対象とすること、2) 本庄市指定文化財131号古墳（万年寺八幡山古墳）、132号古墳（万年寺つつじ山古墳）、136号古墳（蛭影山古墳）、137号古墳（山の神古墳）の4古墳は保留地として公有地化を図るとともに、周堀についても可能な限り現状保存を図ること、3) 前項に掲げた古墳以外については、古墳跡その他すべての遺構について発掘調査の対象とし、確実な記録保存の措置を講ずること、4) 調査の結果、重要な遺構が発見された場合は、保存措置について協議すること等が謳われた。

この協定書の締結を経て、本庄市教育委員会は、昭和63年8月25日付け本教社発第229号で、埼玉県教育委員会あてに当該開発計画にかかる埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行った。埼玉県教育委員会からは昭和63年12月28日付け教文第847号で「埋蔵文化財の取り扱いについて」の回答があり、1) 本庄市教育委員会教育長と本庄市長が締結した「本庄都市計画事業小島西土地区画整理事業地内埋蔵文化財に関する協定書」のとおり実施すること、2) ただし、市指定文化財135号古墳（前の山古墳）の石室については調査終了後に136号古墳（蛭影山古墳）、137号古墳（山の神古墳）の存在する公有地に復原保存し、活用を図ること、3) 調査中に重要な遺構等が確認された場合には、別途協議を行うことの指導があった。

なお、前の山古墳は本庄市指定文化財であることから、その取り扱いについて、平成10年5月、本庄市教育委員会から本庄市文化財保護審議委員会あて諮問を行ったところ、本庄市文化財保護審議委員会からは、指定解除についてはやむをえないとの回答が出された。さらに本庄市文化財保護審議委員会の回答をもとに本庄市教育委員会定例会において審議がおこなわれ、本庄市文化財保護条例第6条第1項の規定により指定が解除された。

発掘調査は、道路建設に伴うA地点の調査（第1次調査）を平成2年5月25日から平成2年6月25日まで、宅地造成に伴うB地点の調査（第2次調査）を平成10年11月4日から平成11年5月31日まで、整理調査を平成11年6月1日から平成13年1月31日までの期間のうちで実施した。

II 遺跡の環境

1 地理的環境

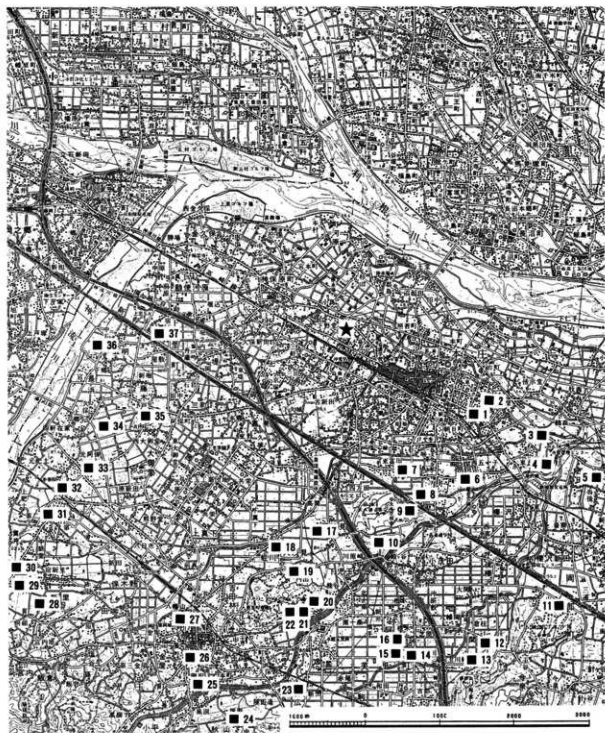
本庄市の地形は利根川右岸に広がる低地と、市街地をのせる台地とに区分される。低地部には利根川の氾濫による自然堤防が発達し、同川沿いに妻沼低地、加須低地へと連続している。いっぽう、台地部は身馴川扇状地と神流川扇状地との複合地形からなり、本庄台地と呼称され、立川期に対応するものとされる。身馴川扇状地は西側を第三系の残丘である生野山、大久保山といった児玉丘陵に、東側を松久丘陵、櫛引台地によって画され、身馴川、志戸川などが北東方向へ流れている。河川の周辺は沖積化が著しく、自然堤防状の微高地が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。神流川扇状地は群馬県鬼石町浄方寺付近を扇頂部とし、扇端部は児玉郡上里町大字金久保から本庄市大字鶴森にかけて広がっている。この扇状地を開析して流れる中小河川には女堀川、男堀川などがあり、周辺には沖積地の形成が顕著である。本書に報告する旭・小島古墳群は、本庄市大字小島から上里町大字神保原にかけての本庄台地扇端部に立地している。台地縁辺部は東流する小山川の浸食により比高差6～10mの段丘崖が発達する。また、周辺の台地上には南南西から北北東の方向に幾筋かの埋没谷があり、狭長な微低地の形成が見られる。

2 歴史的環境

児玉地域は地理的にも上野国に隣接し、武蔵国にありながら過去において常に隣国の影響下にあった地域である。また、古墳時代にあつては、美里町南志戸川遺跡、同日の森遺跡などにみる畿内系、東海系土器の流入、児玉町ミカド遺跡で推定された初期須恵器窯の存在など当該期における流通・生産の中心地としての地位を占めていたと考えられる。さらに、和泉期における甕のいち早い導入に見るような先進性や本庄市公卿塚古墳の格子タタキ技法の円筒埴輪から想定される渡来系工人の移入も含め、その地域的特殊性についてはすでに多くの議論がなされている。以下では児玉地域の古墳の変遷を概観し、旭・小島古墳群をめぐる歴史的環境の理解としたい。

児玉町鷲山古墳は、現在、児玉地域において最古とされる古墳である(坂本1986)。女堀川中流域の小丘陵上に位置し、手焙形土器の破片が採集されたことにより、以前から有力な古式古墳として注目されてきたが、その後の調査の結果、全長60mの前方後方墳となることが判明した。特異な形状を呈する前方部、出土土器などから、築造は4世紀中葉以前に遡るものとされ、県内でも最古の古墳として位置づけられるようになった。しかし、出土した底部穿孔壺形土器は口縁部にも円孔を穿ち、外面調整にはハケを主体的に用いている。このことから、底部にのみ穿孔を有し、ナデ調整による壺形土器に比べ、より機器化が進行し、かつ埴輪への傾斜を深めた段階のものとする評価も可能であろう。鷲山古墳の帰属時期は、なお検討の余地を残すといえる。

美里町長坂聖天塚古墳(径50m)は志戸川右岸の丘陵上に占地する円墳である。粘土槨と木棺直葬の計6基の埋葬施設から稜雲文方格規矩鏡、獸首鏡、滑石製模造品などが出土している。築造時期は鏡の型式、精製品を含む滑石製の刀子の形態などから、前期後半を降らないと考えられる。また、近隣の美里町川輪聖天塚古墳は長嗣化の進行した特異な壺形埴輪を持ち、長坂聖天塚古墳に次ぐ時期の



★旭・小島古墳群 1. 塚合古墳群 2. 御堂坂古墳群 3. 赤坂埴輪窯跡 4. 東五十子古墳群 5. 四十塚古墳群
 6. 西五十子古墳群 7. 公卿塚古墳 8. 有勝寺裏埴輪窯跡・有勝寺北裏遺跡 9. 前山1・2号墳 10. 塚本山古
 墳群 11. 千光寺古墳群 12. 川輪聖天塚古墳 13. 長坂聖天塚古墳 14. 志戸川古墳 15. 道灌山古墳 16. 勝丸稻
 荷古墳 17. 鷺山古墳 18. 蛭川埴輪窯跡 19. 金鑽神社古墳 20. 生野山古墳群 21. 生野山9号墳 22. 生野山将
 軍塚古墳 23. 広木大町古墳群 24. 宇佐久保埴輪窯跡 25. 長沖古墳群 26. 長沖14号墳 27. 八幡山埴輪窯跡
 28. 白岩古墳群 29. 南塚原古墳群 30. 北塚原古墳群 31. 植竹古墳群 32. 関口古墳群 33. 元阿保古墳群
 34. 四軒在家古墳群 35. 大御堂古墳群 36. 下郷古墳群 37. 帯刀古墳群

図1 周辺の遺跡

築造とされる。大久保山丘陵上に立地する本市市北堀前山2号墳は従来、径28mの円墳とされてきたが本市市教育委員会による2・3次調査の結果一辺30m前後の方墳となることが確認された（南毛古墳文化研究会2001・松本2002）。埋葬施設に粘土槨を有し、直刃鎌・剣・刀子等が出土しているほか周堀から土師器埴が検出されている。この北堀前山2号墳と同一尾根上の上位に位置する本市市北堀前山1号墳は、その立地から築造時期は北堀前山2号墳を遡るものと推定される。現在は径30～40mの円墳とされるが、墳裾から南西方向の尾根上に若干の高まりを認めることから、全長60～70m程度の前方後円墳となる可能性も考えられている。

中期前葉から中葉にかけては生野山丘陵に児玉町生野山將軍塚古墳（径60m）、児玉町金鑽神社古墳（径68m）、女堀川流域に本市市公卿塚古墳（径60m）などの大型の円墳が相次いで築造される。児玉地方で古墳がもっとも大型化するのはこの段階であり、いずれも定型化した埴輪を持ち、生野山將軍塚古墳、金鑽神社古墳では段築・葦石の存在も確認されている。また、生野山將軍塚・金鑽神社・公卿塚の3古墳では埴輪に格子タタキ技法の存在することが知られている。生野山將軍塚での実態は明らかではないが、公卿塚ではヨコハケ及びナデ調整によるものと併し、金鑽神社古墳ではヨコハケを欠き、一次タテハケのみのものがこれに加わる。格子タタキ技法による埴輪についてはこれまでも初期須恵器、半島系軟質土器などの系譜的な関係が論じられ、製作に渡来系工人の関与があった可能性は高い。これら3古墳に比べ、やや規模の小さい志戸川流域の美里町志戸川古墳（径40m）、小山川上流域の児玉町長沖157号墳（径32m）ではⅢ式の円筒埴輪を出土し、格子タタキ技法を認めない。なお、公卿塚古墳では盾、家、志戸川古墳では短甲形埴輪の草摺部分が出土している。形象埴輪群全体の組成は明らかではないが、定型化した円筒埴輪とともに形象埴輪も導入されている事実を確認できる。詳細は不明ながら志戸川左岸の水田地帯に存在する美里町道灌山古墳（径40m）、同勝丸稲荷古墳（径30m）もこの頃の築造と推定される（美里町1986）。

中期後葉には前段階のような直径60mクラスの大型円墳の築造は認められず、首長墳は小山川上流の長沖14号墳（径34m）、生野山丘陵の生野山9号墳（径42m）など30～40m台の円墳となる。なお、生野山9号墳では人物埴輪、馬形埴輪の存在が確認され、同種の埴輪としては県内における出現期の資料である。また、古式群集墳もこの段階に形成を開始する。美里町塚本山古墳群の塚本山73号墳（径12m）、同77号墳（径14m）、本市市塚台古墳群の本庄東小学校1号墳（径19m）、同2号墳（径12m）、同旭・小島古墳群の三笠山2号墳（径22m）、上前原5号墳（規模未詳）、杉の根7号墳（規模未詳）などいずれも10～20m前半台の小型円墳で、Ⅳ式の2条突帯3段構成の円筒埴輪を樹立し、TK208段階並行の土器を伴う。美里町広木大町古墳群、本市市西五十子古墳群、同東五十子古墳群、岡部町白山古墳群などはやや遅れて、Ⅴ式の円筒埴輪とTK23・47段階並行の土器を出土する群集墳である。さらに、MT15段階に造営が開始される神川町青柳古墳群では、いち早く横穴式石室を導入されることが知られている。

後期後葉段階に入るとそれまで古墳の存在が知られていなかった地域にも新たに築造が開始される。とくに神流川流域の植竹・関口・元阿保・四軒在家・大御堂などの古墳群は周辺地域の開発の進展にともなってこの時期新たに出現してくる群集墳である。広木大町古墳群、塚本山古墳群、旭・小島古墳群、塚台古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などにも横穴式石室を埋葬施設とする小型円墳が認められ、古式群集墳中に混在もしくは隣接するように群在する。

また、後期段階には首長墓として前方後円墳が採用されるようになる。小山川上流域では児玉町長沖古墳群の長沖25号墳(長40m)、同31号墳(長51m)、同秋山古墳群の秋山諏訪山古墳(長60m)、同生野山古墳群の生野山銚子塚古墳(長58m)、生野山16号墳(長58m)、小山川中流の岡部町四十塚古墳群の真稻荷古墳(長52m)、本市市塚古墳群中の大林二子山古墳(規模未詳)、同旭・小島古墳群の下野堂二子塚古墳(規模未詳)、神流川流域の神川町青柳古墳群の白岩銚子塚古墳(長46m)、中新里諏訪山古墳(長42m)などが知られる。

終末期には岡部町前原愛宕山古墳(辺37m)のような方墳と旭・小島古墳群の上里町浅間山古墳(径38m)のような円墳とが前方後円墳に代わる首長墓として採用されている。また各地の群集墳も後期後葉段階からの連続的な造営が確認できる。

埴輪生産遺跡は、児玉地域で4箇所を確認している。また、未確認ながら埴輪生産遺跡の所在を想定できる地点が複数存在している。この地域では、鴻巣市生田塚窯や深谷市割山窯のような大規模な操業は見られず、狭い地域に小規模な生産遺跡が散在する点に特色がある。

美里町宇佐久保埴輪窯跡は、上武山地の北東側に連なる丘陵の端部に位置し、南北を二つの小谷によって挟まれ、東方へ延びる舌状丘陵の北側裾部に占地している。埴輪窯跡は、採土により掘削された丘陵の断面で、いずれも焼土層の落ち込みとして確認されたもので、窯体の規模や構造が判明するものはない。分布調査において確認できた窯跡は12基で、掘削による丘陵断面はさらに東西方向に延長していたが、他には窯跡を認めなかったことから、報告者はこの丘陵斜面に構築された窯の総数は、調査時に確認した12基を上回らないと予測している(山川ほか1981)。

児玉町八幡山埴輪窯跡は、かつて県立児玉高等学校の敷地内に所在した埴輪窯跡群である。1930年、八高線敷設工事の土取り中に発見され、その際、人物埴輪、馬形埴輪などが出土した(埼玉県1982)。その後、1961に高等学校の校地拡張工事に伴い、2基の埴輪窯を調査している。窯は「半地下式有段登窯」とされ、円筒埴輪、女子人物埴輪の頭部を検出している(柳1961)。現在、遺物の所在が明らかではなく、窯の操業年代、埴輪の型式的特徴などは不明である。

本市市赤坂埴輪窯跡は、女堀川右岸の本庄台地北東端部に位置する。工場建設に際する整地作業中に、焼土とともに馬形埴輪が出土し、その後、工場内に機械を設置するため掘削をおこなったところ、ふたたび焼土とともに大型の馬形埴輪と家形埴輪を出土したことなどから埴輪窯跡の存在が想定されている(菅谷1976c)。本市市教育委員会では、この際に出土したと考えられる家形埴輪片1点を保管している。

児玉町姪川埴輪窯跡は、町立共和小学校の校庭を整地した際に、多量の埴輪と焼土が出土したとされ、埴輪窯が存在した可能性が考えられている(鈴木1983)。遺跡は、女堀川中流の右岸に発達した自然堤防上に占地する。すでに一帯の耕地整理が終了しているため、地形の原状は著しく変化し、出土地点の詳細を確認することは難しく、現在では正確な出土地点も特定できなくなっている。その後、同小学校敷地内の近接地点でも発掘調査を実施しているが、埴輪や焼土の出土を確認していない。埴輪窯跡が実在した場合でも、さほど広範囲に分布するものではないことが予測される。

なお、実態は全く不明ながら、美里町から大里郡岡部町にかけての山崎山周辺にも埴輪生産遺跡の存在を指摘する意見がある(橋本・佐々木ほか1980)。

3 旭・小島古墳群の概要

旭・小島古墳群は本庄台地北縁部に立地し、本庄市大字小島、同万年寺から児玉郡上里町大字神保原にかけて分布する。群中央に南南西から北北東方向へ伸びる埋設谷が存在し、現在でも微低地を形成しており、古墳群はこの微低地を隔てて大きく東西二群に分れる。前方後円墳、帆立貝式古墳、円墳、方形墓（方墳）の混成による古墳群で、前期から終末期まで、断続的な造営を認める。以下、時期を追って古墳群の形成過程を概説する。

旭・小島古墳群の形成は西群北半に群在する方形墳の築造をもって開始されると考えられる。現在まで20基余りが検出されている。

万年寺つつじ山（辺25m）は、高さ1.7mの墳丘が残存し、確認調査時に表土直下で、刀子、斧、直刃鎌、短冊形鉄斧などの石製模造品が出土している。出土地点は墳丘中心から北西方向に大きく外れる位置にあり、埋蔵施設その他の遺構に伴う状況とは認定できない。前方後円墳共通編年4期に該当すると考えられる（南毛古墳文化研究会2001）。

万年寺10号墓（辺24m）では、周堀の立ち上がり部から石釧が出土している。碧玉製とされ、埋蔵施設に伴う状況では確認されていないが、型式的には通有の古墳副葬品のうちに見られるものと同形である。

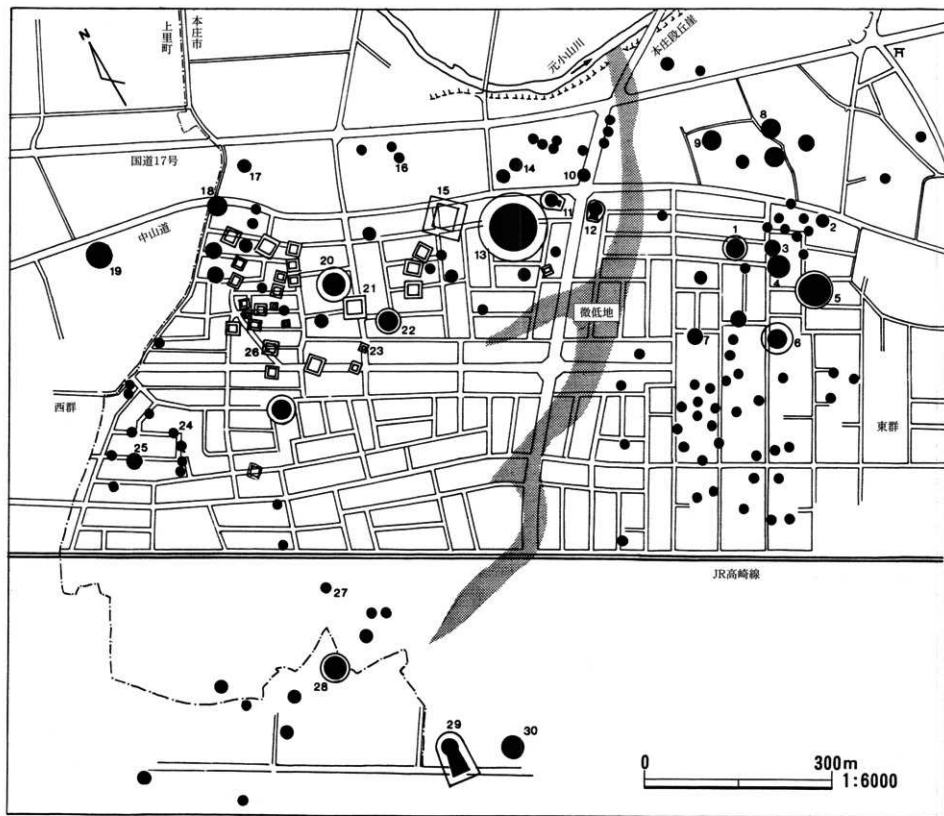
林7号墓、同8号墓は、1辺30mを超える大型の方形墓になると推測され、群集墳を主体的に構成するような小型円墳をははるかに凌ぐ規模を有する。また、林11号墓では木棺直葬の埋葬施設の一部が検出されている。

これらの方形墓は、これまで「方形周溝墓」として一括される場合が多かった（並木1976・菅谷1976 a・埼玉1982）。しかし、円墳とされてきた本庄市北堀前山2号墳が、最近の調査の結果、一辺25m方墳である事実が確認されたことや、万年寺つつじ山、万年寺10号墓などに見るように低墳丘方形墓の副葬遺物に古墳副葬品と同様の品目が含まれていること、さらに前期の小型方墳群が列島各地に確認できることなどを考慮すると、旭・小島古墳群中の方形墓についても「方形周溝墓」とする従来の理解に対して再検討が必要である。

万年寺八幡山古墳（径43m）は、埋葬施設に箱式石棺を有することが知られていたが（本庄市1986）、近年の確認調査で石棺内から鉄剣2本が出土した。この箱式石棺は墳丘中心を大きくはずれる位置にあることから、同墳には未確認の中心主体部が存在すると考えらる。埴輪を伴わず、数次の周堀調査によっても遺物を検出できていないため築造時期の詳細は不明であるが、前期に遡る可能性も考えられる（南毛古墳文化研究会2001）。南東側に隣接する万年寺つつじ山古墳とは双方の周堀が重複する関係にあるが、覆土の切り合いは確認できていない。

中期中葉に属する古墳は明らかではない。当該期の児玉地域は首長墓に本庄市公卿塚古墳（径65m）、児玉町金鎖神社古墳（径68m）、同生野山將軍塚古墳（径60m）、同長沖157号墳（径32m）、美里町志渡川古墳（径40m）などの大・中型円墳の存在が目立つが、現状において旭・小島古墳群には中期の有力古墳が認められない。また、上記の諸古墳にはすでに埴輪の樹立も認められるが、旭・小島古墳群では埴輪の導入も他に遅れるようである。

中期末葉には群集墳の築造が開始され、埴輪も導入される。三笠山2号墳（径43m）では、2次調整B種ヨコハケの円筒埴輪に和泉後半期の土師器内斜口縁坏が共伴する。また、上前原5号墳（径26



- 1 前の山古墳
- 2 上前原5号墳
- 3 蜚影山古墳
- 4 山ノ神古墳
- 5 小島御手長山古墳
- 6 坊主山古墳
- 7 堂場13号墳
- 8 小島諏訪神社古墳
- 9 本庄138号古墳
- 10 三奈山8号墳
- 11 三奈山7号墳
- 12 三奈山9号墳
- 13 三奈山古墳
- 14 三奈山2号墳
- 15 万年寺山古墳
- 16 小島北浦3号墳
- 17 石神境古墳
- 18 御嶽塚古墳
- 19 上里野浅間山古墳
- 20 万年寺八幡山古墳
- 21 万年寺つつじ山古墳
- 22 万年山高山古墳
- 23 林11号墓
- 24 杉ノ根7号墳
- 25 下野堂御手長山古墳
- 26 下野堂10号墓
- 27 山本1号墳
- 28 山本5号墳
- 29 下野堂二子塚古墳
- 30 下野堂開拓1号墳

図2 旭・小島古墳群分布図

m)でも2次調整B種ヨコハケの円筒埴輪を備えることが判明しており、同時期には東群においても確実に古墳の造営が開始されている。円筒埴輪は2条突帯3段構成の小型品で、半円形の透孔をもつ。家、人物、馬などの形象埴輪は確認できない。北浦3号墳は埴輪をもたないが、出土した直立口縁をもつ土師器環は、典型的な坏蓋模倣坏出現以前の型式で、和泉期後半段階に該当し、築造時期は中期後葉に遡る(太田1990)。さらに、出土遺物がなく所属年代を確定できない小型円墳の中にも、当該期の築造と推測される事例が存在する。

後期初頭においても群集墳の造営は継続し、三笠山8号墳(規模不詳)では円筒埴輪、朝顔形埴輪とともに家、女子人物、男子武装人物、盾持人物、馬、鳥など豊富な形象埴輪が加わっている。武装人物は埼玉稲荷山古墳出土例に酷似した眉庇付冑の表現があり注目される。この後期初頭から前半にかけては三笠山7号墳(29m)、三笠山9号墳などの帆立貝式古墳を中核とし、三笠山1・3～6号墳号墳、杉ノ根7号墳など低平な墳丘と竪穴系埋葬施設を有する小規模な円墳が多数築造され、前段階からの連続的な群集墳造営を認める。

後期後半には東群に大型円墳が集中するようになる。小島御手長山古墳(径42m)はその中で最大の規模を有し、角閃石安山岩の加工丸石を用いた横穴式石室が検出されている。副葬品に挂甲、直刀、鉄鏃、馬具などがあり、埴輪は円筒、朝顔、家、人物、大型の馬などが出土している。隣接する坊主山古墳(径36m)、山の神古墳、蜷影山古墳、前の山古墳、堂場13号墳も埋葬施設に横穴式石室を備え埴輪を樹立する古墳で、築造時期は後期のうちでもとくに末葉段階に集中すると考えられる。坊主山古墳では直刀、刀装具、鉄鏃、玉類、前の山古墳では耳環、ガラス玉が出土し、また、山の神古墳、蜷影山古墳、前の山古墳では段築、葦石の存在が確認されている。いっぽう、西群の上里町側にも神保原浅間山古墳(径30m)があり、埴輪を備え、横穴式石室からは直刀、鉄鏃、耳環、玉類のほか銅鏡が出土している。

下野堂二子山古墳は旭・小島古墳群中唯一の前方後円墳である。墳丘はすでに削平を受け段築、葦石、埋葬施設などの状況は不明であるが、航空写真、地籍図の分析から全長60m前後の規模と推定される。試掘調査では年代を示す資料が得られていないが、埴輪が確認されないことを根拠に埴輪生産停止後の築造とすれば後期末葉の時期が考えられる。

終末期古墳には、下野堂開拓1号墳(径22m)、下野堂御手長山古墳(径20m)、堂場地区に集中する堂場1～9号墳など、不整形の周堀をめぐらす直径10～20m前半台の円墳が知られる。下野堂開拓1号墳(径22m)では石室覆乱層からは鉄製の金交具、刀子、釘が出土し、石室前底部から大量の土師器・須恵器片のほか青銅製の巡方3点、丸柄2点が検出されている。堂場1～9号墳では7世紀前半から後半代までの土器が共伴しており長期間の追葬が想定される。終末期の有力な古墳には方墳を採用する地域もあるが、群内での所在は現状で確認できない。

なお、三笠山古墳は直径64m、高さ3.2m、周堀幅26mを測る群内最大の大型円墳であったが、全面的な発掘調査にもかかわらず埋葬施設の所在を確認できていない。調査前の墳丘高は3m強で、墳丘径と比較してきわめて低平であったことを考えると、本来の墳丘が、後代に埋葬施設とともに削平を受けたことも想定される。しかし、墳丘、周堀からの出土遺物は皆無であり、埋葬行為自体が施行されなかった可能性も否定できない。調査では、墳丘構築土中に火山噴出物と思われる灰層の堆積を検出している。

III 調査の方法と経過

1 A地点（第1次調査）

(1) 調査の方法

調査区には残存する墳丘との位置関係から、周堀の存在する可能性が高いものと予測された。そこで、重機を用いて当該工事範囲の表土を全面的に除去し、周堀の範囲と形状とを確認した後、人力で周堀覆土の掘削を行った。調査区中央には土層観察用のベルトを残し、覆土の堆積状況を記録するとともに、航空写真測量を行って遺構平面図・コンタ図の作成に必要な記録を作成した。

(2) 調査の経過

現地調査は平成2年5月25日から平成2年6月25日の間に実施した。5月25日に重機を搬入して調査区の表土掘削作業を開始し、同日のうちに作業を終了した。表土掘削作業終了後、作業員を投入して遺構の確認に入り、5月27日までに作業を終えた。周堀覆土の調査は、遺構確認作業の終了した範囲から順次開始した。6月24日までに周堀覆土の調査、土層断面実測・写真撮影などの記録、調査区全面清掃を終えて、6月25日に航空写真撮影を実施し、機材の撤収を行ってすべての作業を終了した。

2 B地点（第2次調査）

(1) 調査の方法

調査は、測量図を基に墳丘中心部と推定される部分を交点とし、東西・南北方向の十字の土層観察用ベルトを設定し、全面の表土を人力で除去し、墳丘残存面の検出を試みるとともに、墳裾部、周堀の範囲と形状を確認した。石室および葺石の検出状況は写真実測を実施した。墳丘については土層観察用ベルトを残して裁ち割りを行い、墳丘構造・築造方法の把握に努め、墳丘盛土層断面の状況を記録した。最後に土層観察用ベルトを撤去し、石室基盤面の構造、墳丘構築前の整地作業の状況、祭祀行為の痕跡の確認をおこない写真・図面等必要な記録を作成した。

(2) 調査の経過

現地調査は平成10年11月4日から平成11年5月31日の間に実施した。平成10年11月4日から作業員を投入して草刈り、土層観察用ベルトを設定した後、表土の掘削作業を開始した。その結果、墳頂部に大規模な盗掘坑を確認するとともに、墳丘南側斜面から墳裾にかけて、崩落した葺石とともに多量の埴輪を検出した。埴輪の出土状況は樹立位置を反映するものと判断されたため、図面・写真等必要な情報を記録しつつ取り上げた。表土を完全に除去した段階で葺石の一部が残存していることが確認できた。墳丘および葺石検出状況は写真実測により記録した。平成11年2月から墳頂部盗掘坑の掘削を開始し、石室の遺存状況を確認するとともに、前底部の検出作業に入った。石室、前底部とも攪乱が著しく、わずかの遺物を確認するにとどまった。状態は続いて墳丘の断ち割りをおこない、墳丘盛土の状況は写真実測で記録した。調査の最終段階で、墳丘下の旧表土上において、一括の土師器が出土したため記録を作成した。終了後、機材の撤収をおこない作業を完了した。

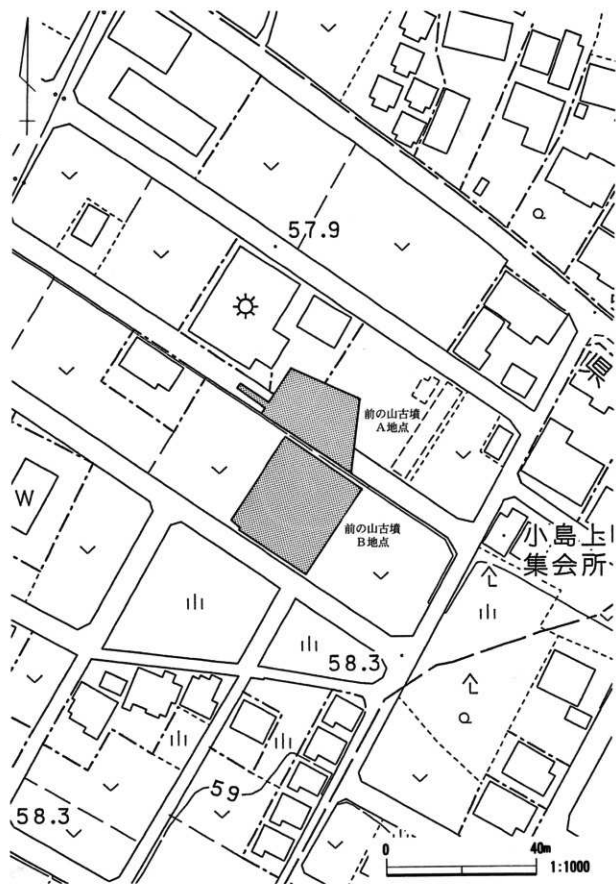


図3 調査区位置図

IV 調査の成果

1 遺 構

(1) 墳 丘

a. 調査前の状況

古墳は、かつて松などの樹木に覆われていたが、調査前の段階では全面の草地となっていた。平坦面が狭く、墳丘東側から北側にかけては、土取りによる崖面を形成し、一部は墳丘盛土が露出した状態であった。南側から西側にかけても、各所に攪乱による起伏を生じていたが、中段斜面部は比較的良好な遺存状態を保っているように観察された。西側の一部では、礫がまとまって露出している箇所があり、葦石の遺存も予測された。墳頂部は四周からの掘削によりわずかな平坦面を残すのみとなっていた。東側裾部には南北方向に直線的な段差が残っていたが、この段差はA地点の調査時に存在していた農作業小屋の建造に伴う切土によるもので、その農作業小屋もB地点調査時には完全に撤去され、一帯は全面の草地となっていた。

なお、事前踏査の段階で、露出した墳丘盛土層の状況や大型川原石、加工痕のある角閃石安山岩の散布などから、埋葬施設には横穴式石室を備える可能性の高いことが予測された。

b. 墳丘の構造

前の山古墳は、地山削り出しと盛土により墳丘を構成している。段築構造は、3段築成で、第2段および第3段の下部には葦石がめぐらされる。墳丘の遺存状態は、南側から西側にかけては比較的良好であったが、北側から東側にかけては、土取りによる破壊が著しく進行し、原状をとどめる箇所は存在しなかった。墳丘規模は、周堀底からの立ち上がり部の計測値で、南北直径約24m、高さ3.5mを測る。

表土層の厚さは墳頂部付近で10～15cm、墳丘裾部で60～100cmを測る。とくに墳丘裾部では崩落した葦石や埴輪片を多量に含んで分厚く堆積する地点を各所に検出した。いっぽう、墳丘中段にはほとんど表土の存在しない箇所もあり、調査前に確認した西側中段斜面部に露出する礫塊は、調査の過程で墳丘第3段の裾部をめぐる葦石の一部であることが判明した。墳丘南西側の裾部には、多量の川原石を含みまとまった表土溜まりが存在した。一見、墳丘突出部のようであったが、多数の埴輪片が混入することから墳丘上の堆積層と判断された。

墳丘第1段は地山を削り出して形成している。削り出しの深さは20～30cm程度で、地山最上層の旧表土の範囲にとどまる。周堀底からの高さは40cm前後を測る。

墳丘第2段は、旧表土を削り出して形成した墳丘第1段の上に、盛土を用いて構築している。高さ約80cmを測り、斜面には径10～15cmの楕円礫で葦石を施している。墳丘南側の一部では、葦石を斜面最上部まで葦いた状態を確認できた。墳丘第2段は斜面全面に葦石を施していたと推測される。

墳丘第3段は、墳丘第2段上に盛土を用いて構築し、残存高約2mを測る。第2段と同様に斜面には径10～15cmの楕円礫で、裾部から高さ約90cmの範囲に葦石を施している。墳頂部平坦面はすでに消滅しており、この部分の工作の実態は不明である。

墳丘第2・3段の構築に使用している土は、旧表土、ローム、旧表土とロームのブロックを混合し

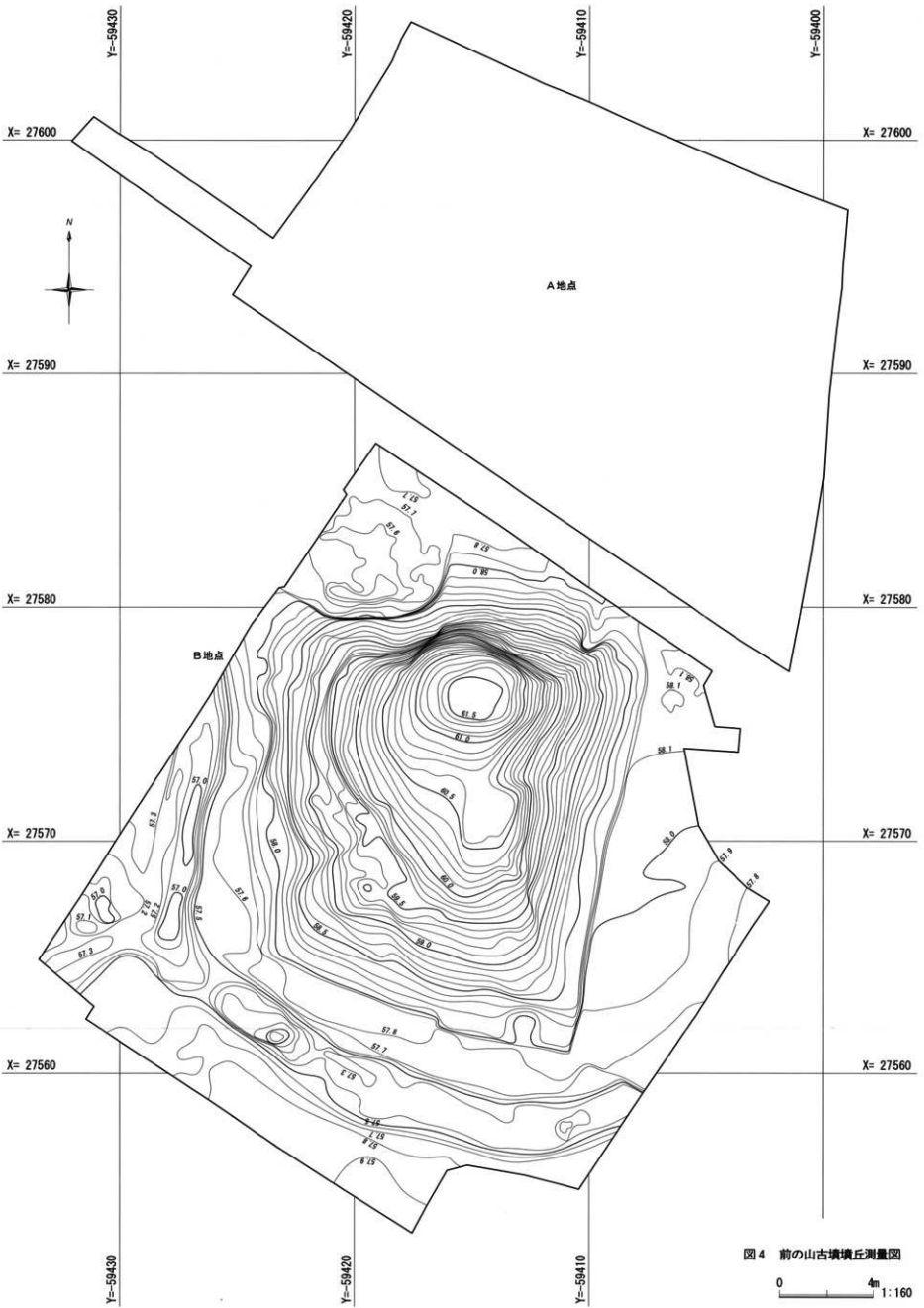


図4 前の山古墳横丘測量図

0 4m 1:160

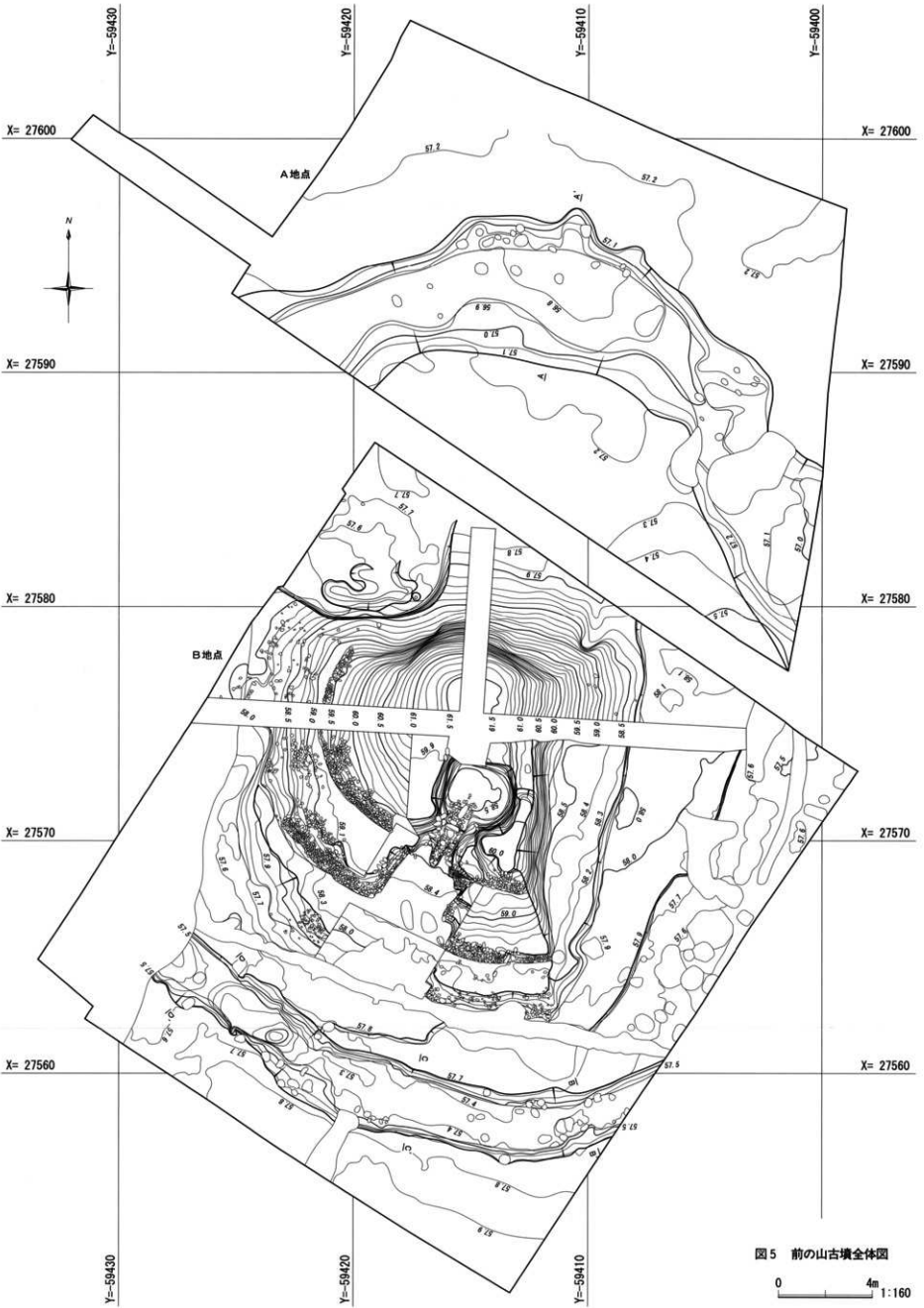


図5 前の山古墳全体図

0 4m
1:160

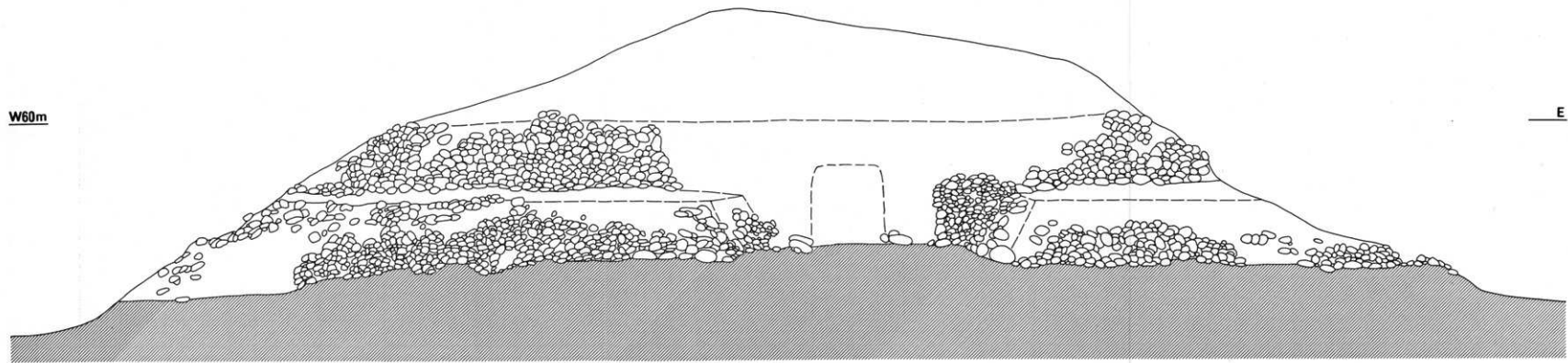
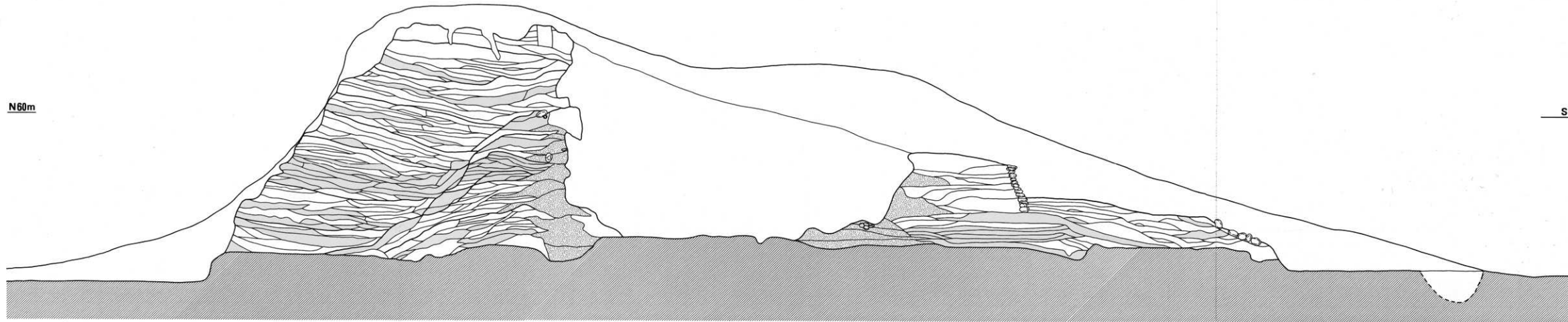


图6 石室開口部方向墳丘立面図

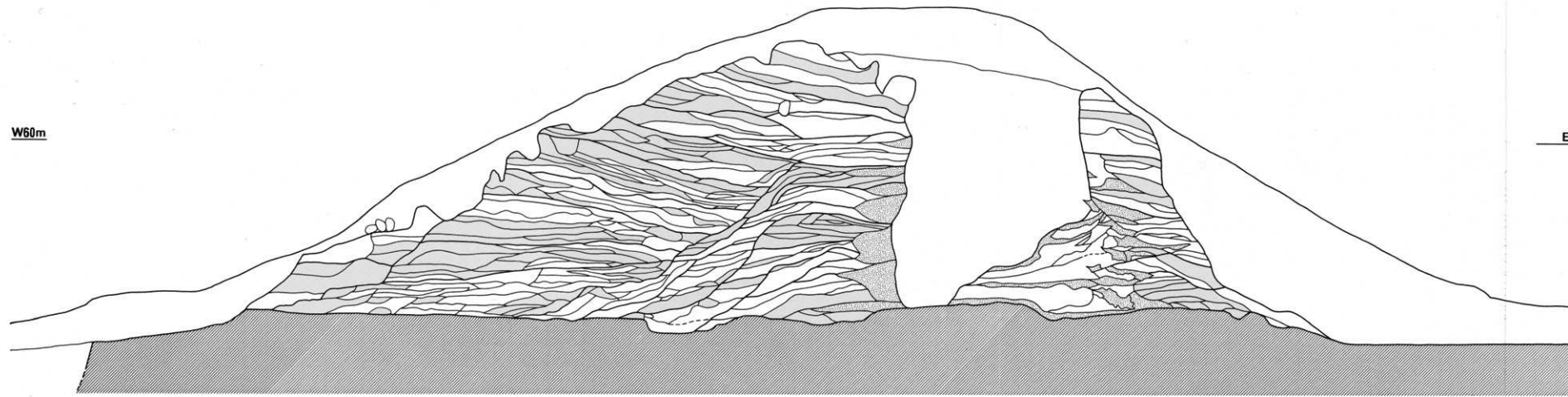
N60m

S



W60m

E



- 黑色土
- 砂 礫
- 旧表土

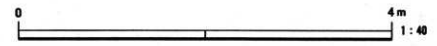


图7 南北 (N-S)·东西 (W-E) 填丘断面图

たものの3種類である。各層の厚さは5～15cm程度で、墳丘第3段の上位ではやや厚味を増すものの、全体にきわめて緻密な盛土構造を持っている。

断面の観察から、墳丘構築過程は、おおよそ4次の工程に復原できる。

第1工程は、地山削り出しによって形成した墳丘第1段の上面に、石室壁の構築と並行しながら、石室裏込の砂礫層と盛土となる旧表土、ロームとを石室壁最上位まで互層に積み上げている。上部には平坦面造り出し、その周囲は斜面をなしているの、石室開口部を除く全体形は截頭円錐状を呈している。

第2工程は、第1工程で構築した截頭円錐状の墳丘中心部を取り囲むように、その周囲に盛土を施している。この第2工程は第1工程で構築した墳丘中心部の中程の高さで盛土を終えている。また、第2工程の盛土は、下層から中層にかけては水平ないし外側に傾斜を持たせて積んでいるのに対し、上層では逆に中心寄りの部分を内側に傾斜させて積んでいる。

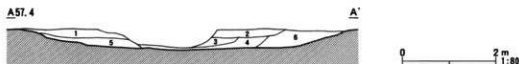
第3工程は、第2工程盛土の上に、内側に傾斜を持たせて積んでいる。その際、第3工程の盛土の範囲は、第2工程盛土縁部から1mほど内側にとどめ、外縁を墳丘第2段のテラス面としている。また、この第3工程盛土の外側斜面は、墳丘第3段の裾部葺石の範囲に一致する。高さは外側が高く、内側は第1工程の墳丘中心部の上位に揃えている。このことから、第3工程終了後の墳丘上面は浅い襷鉢状を呈していたものと推測される。なお、石室天井石の架工は、これら第2・第3工程の途中から、つぎの第4工程が開始されるまでの間に行ったと考えられる。

第4工程は、石室天井石の架工までを終えた墳丘上面に盛土を行うもので、墳丘第3段の上位に該当する。第3工程までの盛土と比較して1層の幅が厚い傾向を認める。

(2) 周 堀

a. A地点

A地点では墳丘北東側から北側にかけての周堀を検出した。確認面での平面設計は立ち上がり内外ともに緩やかに蛇行し、整円形を呈さない。周堀底からの立ち上がりの角度は、外側に比べ内側が緩やかになる傾向を認める。幅4.2m～6.0m、確認面からの深さ0.4m前後を測る。掘削は旧表土下のローム層まで及び、ローム層下の白色粘質土層が露出した状態である。覆土は3層に大別され、上層に黒褐色土ないし黒灰褐色土、下層に灰褐色土ないし暗灰褐色土、周堀外側の立上りに暗黄褐色土の堆積を認める。



前の山古墳A地点

- | | | | |
|---------|-----------------------------|---------|------------------------------|
| 1 黒灰褐色土 | As-A、ロームブロック、礫(径5～10mm)を含む。 | 4 灰褐色土 | As-A、ロームブロック、礫(径2～10mm)を含む。 |
| 2 黒褐色土 | 礫(径2～10mm)を多量に含む。 | 5 黒灰褐色土 | ロームブロックを霜降り状に含む。礫(10mm土)を含む。 |
| 3 暗灰褐色土 | As-A、礫(径2～10mm)を若干含む。しまり強。 | 6 暗黄褐色土 | ローム風化土の堆積層。 |

図8 前の山古墳A地点土層断面図

b. B地点

B地点では墳丘南東側から石室前面にかけての周堀を検出した。幅2.8m前後、確認面からの深さ0.4m前後で、A地点で検出した不整形の設計と異なり、ほぼ円形にめぐっている。南西側の一部には土坑状の掘り込みが存在し、この部分では確認面からの深さ0.9mを測る。掘削は旧表土下のローム層にまで及び、ローム層下の白色粘質土層が露出した状態であった。南西側の土坑状の掘り込み部分では、白色粘質土層にまで掘削が及び一部に礫層が露出していた。調査区西側では南北方向に走る暗渠と攪乱により破壊を被り完全に消滅していた。覆土は全体に黒褐色土の堆積を認める。



図9 前の山古墳B地点周堀断面図

(3) 埋葬施設

前の山古墳の埋葬施設は、前庭部を有し、南西方向に開口部を向ける横穴式石室である。すでに著しい攪乱を被り、とくに玄室から羨道にかけては、天井石から奥壁、側壁、根石に至るまで構築石材の大半が抜き取られた状態であった。

a. 攪乱坑

表土を除去した段階で、墳頂部において東西3.8m、南北4.5mほどの不整形をなす攪乱坑の輪郭が検出された。墳頂から約3mの深さまでほぼ垂直に掘り込まれており、石室床面もほとんどを失っていた。内部には全体にしまりの弱い灰褐色土が堆積し、上層には浅間A軽石(As-A)が大量に混入していた。

b. 玄室

玄室壁で原位置を保つ石材はわずかに玄門右側周辺の基底部分のみである。角閃石安山岩の加工材を用い、玄門にはとくに大型の石材が選択されている。右側の袖部は明瞭な屈曲を持たず、緩やかな角度をもって玄門から側壁へと移行している。側壁から奥壁にかけては、盗掘時の掘削が深く、根石の抜去痕すらも認められず、石室設計の詳細、使用石材の種別を確定する手掛かりは得られなかった。ただし、攪乱坑内部で検出した石材は、多くが人頭2倍大の細長い川原石であった。このことから、玄室壁面の大半は、川原石の自然石により構成されるもので、角閃石安山岩を主体とするものでなかったと推定される。また、緩やかな角度で玄門から側壁へと移行する右側袖部の状況から、徳利形に近い胴張形式の平面設計が推測できる。

床面も玄門周辺の一部を除き、ほとんど残っていない。玄門周辺では川原石の小円礫を、根石の第2段目まで敷き詰め、隙間には角閃石安山岩の削り屑を充填した状態が観察された。

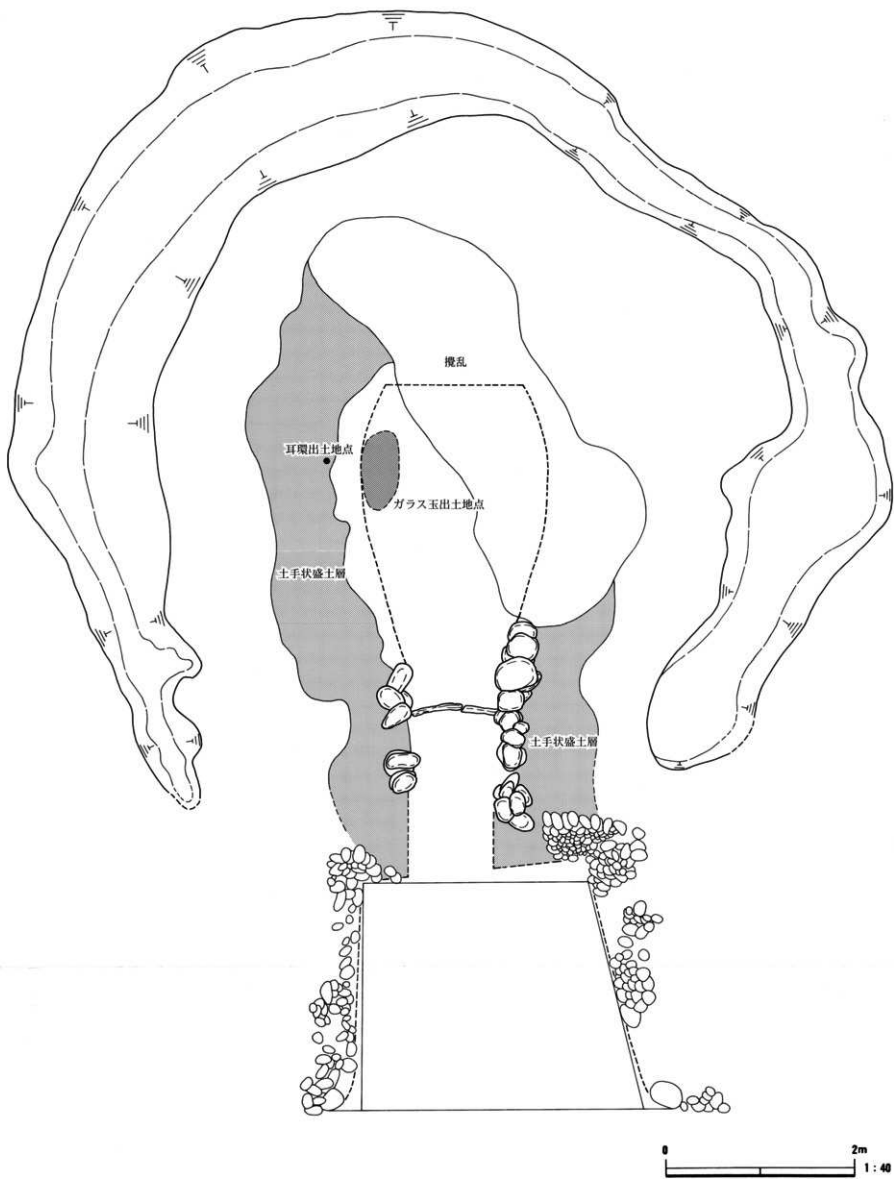
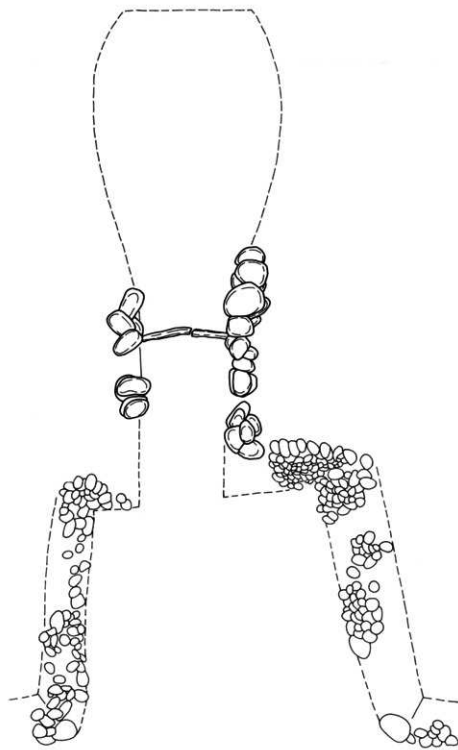
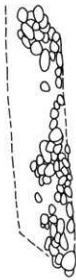


図10 石室および石室基盤構造平面図

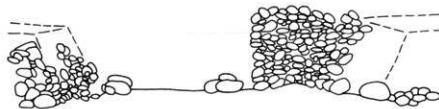
S59.5m



N59.5m



W59.5m



0 2m 1:40

图11 石室前庭部平面·立面图

c. 羨道

羨道においても、原位置を保つ石材はわずかで、右側壁基底の一部と左側壁羨門付近の基底の一石が残存しているのみであった。根石には、玄室と同様に角閃石安山岩の加工材を用いている。床面は判然としないが、根石の第2段目まで楕円礫を敷き詰めており、玄室とほぼ同じレベルと推定される。玄門から40cmほど羨門寄りの床面には緑泥片岩の板石2枚が縦に埋め込まれている。羨道後部の閉塞石ないし仕切石の一部と判断される。また、羨道後部から玄門周辺にかけての攪乱土からも、長さ80cm、幅30cm、厚さ10cm内外を測る緑泥片岩の板石3枚を検出している。これらの板石も同様に羨道後部の閉塞石ないし仕切石もしくは玄門の袖石であった可能性が高い。なお、羨門部には人頭大の礫が3段に積み重ねられている箇所があり、閉塞石の一部と考えられる。

d. 前庭部

羨道の前面には前庭部が付設されている。平面設計は左奥壁と側壁の隅はほぼ直角であるのに対し、右奥壁と右側壁の隅は15°ほど外側に開いているため不整な台形を呈する。規模は、いずれも基底部での値で奥壁幅2.4m、入口幅3.2m、奥行き3.0mを測る。前庭部平坦面のレベルは羨道床面と変わらず、旧表土の黒色土層を整地して形成している。

壁面は角閃石安山岩の加工材や川原石を用いて葺石状に被覆している。左右奥壁の構築は、羨門構築後に行われ、墳丘第3段目の葺石に連続している。比較的遺存状態の良好な右奥壁では基底部幅1.9mを測り、高さ1.0mまで積み上げられた状況が確認できる。根石に20cm大の角閃石安山岩の加工材を用い、壁面は8×20cm前後の偏平な川原石を小口積にし、20段前後が遺存していた。側壁の構築は、奥壁構築後に墳丘第2段目の築造と並行して行われている。左右側壁の上端は墳丘2段目の平坦面まで達している。

なお、前庭部平坦面には敷石、仕切石などの施工は確認できなかった。

e. 基盤の構造

石室の基盤構造は、墳丘盛土下の旧表土層に工作を加えたものである。石室裏込め及び墳丘盛土第1工程の外縁部に相当する角閃石安山岩を充填した馬蹄形の溝と、根石の外側をめぐるように構築された土手状の盛土層、土手状盛土層内側の窪みに敷設された整地層からなる。

裏込め外縁をめぐる馬蹄形の溝は、外径8.5m～9.3m、幅0.6～1.6m、深さ10cmの規模で、旧表土層を掘削し、内部には角閃石安山岩の削り屑を充填して硬くしまっている。

土手状盛土層は、幅0.6～1.2m、高さ30cm前後で、厚さ5cm前後の単位を5～6層盛り上げて構築している。攪乱により東側から北側にかけての一部を失っている。

土手状盛土層内部の整地層は、石室床面に対応するもので、小礫に砂を混合したものを充填し、硬くしまっている。

以上の石室下部の構造は、いずれも石室基盤の強化を目的とした工事で、石材の沈降や横ずれなどの防止を意図したものと推測される。

2 遺物

(1) 副葬遺物

a. 遺物の出土状況

副葬遺物はガラス玉27点、耳環1点を検出した。ガラス玉は、玄室左側の中央からやや玄門よりの床面攪乱層から出土した。原位置をとどめるものはなく、1.2×0.5mの範囲に散乱した状態であった。耳環は、玄室左側の中央からやや奥壁よりの石室根石の外側をめぐる盛土層との境界付近で出土した。

なお、種は同定できないが、玄室左側の中央からやや奥壁よりの根石際と想定される付近で、微細な骨の破片を少量検出している。

b. ガラス玉 (図12)

いずれも完形である。黄色、緑色、青色、水色の4色があり、内訳は黄色13、緑色4、青色4、水色6である。大きさは黄色が3.5～6.0mm、緑色が3.7～4.0mm、青色が4.0～5.0mm、水色が2.7～4.0mmで、黄色と青色に大型品が多い。

c. 耳環 (図12)

金銅製で、ほぼ完形である。太さ7mm、外径18mm、内径11mm、重さ7.20gを測る。表面の金箔は半分ほど剥落しているが、遺存している部分は良好な状態を保っている。断面形は整円ではなく、縦長の楕円形を呈する。

(2) 墳丘出土遺物

a. 遺物の出土状況 (図13、写真6・7)

墳丘上及びその周辺からは、埴輪、須恵器、土師器が出土している。

埴輪は、多くが原位置から転落、破断した状態で、検出状況から樹立位置を特定しうる個体はきわめて限定される。埴輪片の分布は、石室前庭部を中心に、墳丘南側から西側の中段以下に集中する傾向がある。

石室前庭部の擁壁から連続する墳丘第2段の平坦面に、形象埴輪の基部が遺存していた。石室前庭部の左側平坦面では、擁壁上端から1mほど離れた位置に、やや外側に傾いた状態で盾持人物〔図24～26-16〕の基部を検出した。原位置を保つと判断されるのはこの個体のみである。上位の破片は墳丘第1段の平坦面に集中して落下していたほか、北西方向に離れて第2段の平坦面や葺石上に散在していた。墳丘第2段の平坦面では、盾持人物16の基部出土地点のさらに北西方向に小規模な攪乱坑があり、ここから盾持人物の頸部〔図27～28-17〕を検出している。

石室前庭部の右側では、墳丘2段平坦面は、外側の2分の1ほどが崩落しており、この部分から盾持人物〔図21～23-15〕の基部が、葺石とともにほとんど横転した状態で出土した。上位の破片は、石室前庭部から墳丘第2段葺石上、墳丘裾部にかけて放射状に散乱していた。頭部は墳丘第2段葺石の下端部に落下していた。また、この盾持人物基部出土地点の東側約1mの地点に女子人物埴輪〔図30～32-21〕の破片が集中し、一部は墳丘裾部や前庭部にまで移動していた。さらに、その東方では4条突帯5段構成の大型円筒埴輪片がややまとまって出土した。

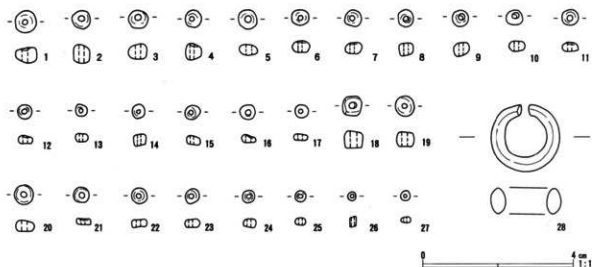


図12 石室出土遺物実測図

前の山古墳玉類・耳環観察表

No	種類	残存状態	色調	計測値				備考
				直径(cm)	孔径(cm)	幅(cm)	重さ(g)	
1	ガラス玉	完形	黄色	0.60	0.15	0.40	0.1	
2	ガラス玉	完形	黄色	0.45	0.15	0.50	0.1	
3	ガラス玉	完形	黄色	0.45	0.14	0.40	0.1	
4	ガラス玉	完形	黄色	0.45	0.13	0.40	0.1	
5	ガラス玉	完形	黄色	0.50	0.17	0.25	0.1	
6	ガラス玉	完形	黄色	0.45	0.13	0.30	—	
7	ガラス玉	完形	黄色	0.40	0.13	0.30	—	
8	ガラス玉	完形	黄色	0.40	0.13	0.30	—	
9	ガラス玉	完形	黄色	0.40	0.14	0.30	—	
10	ガラス玉	完形	黄色	0.40	0.12	0.25	—	
11	ガラス玉	完形	黄色	0.45	0.13	0.20	—	
12	ガラス玉	完形	黄色	0.40	0.12	0.20	—	
13	ガラス玉	完形	黄色	0.35	0.12	0.20	—	
14	ガラス玉	完形	緑色	0.40	0.10	0.30	—	
15	ガラス玉	完形	緑色	0.40	0.12	0.25	—	
16	ガラス玉	完形	緑色	0.40	0.17	0.20	—	
17	ガラス玉	完形	緑色	0.37	0.12	0.25	—	
18	ガラス玉	完形	青色	0.50	0.18	0.15	0.2	
19	ガラス玉	完形	青色	0.50	0.13	0.40	0.1	
20	ガラス玉	完形	青色	0.50	0.17	0.27	0.1	
21	ガラス玉	完形	青色	0.40	0.13	0.18	—	
22	ガラス玉	完形	水色	0.40	0.13	0.20	—	
23	ガラス玉	完形	水色	0.40	0.13	0.22	—	
24	ガラス玉	完形	水色	0.35	0.12	0.22	—	
25	ガラス玉	完形	水色	0.30	0.10	0.18	—	
26	ガラス玉	完形	水色	0.20	0.10	0.25	—	
27	ガラス玉	完形	水色	0.27	0.10	0.15	—	
28	耳環	完形		1.80	1.10	0.7	7.2	

石室前庭部では、右側擁壁沿いに4条突帯5段構成の大型円筒埴輪〔図14-1〕が墳丘第2段平坦面から転落した状態で出土したほか、上層から円筒埴輪〔図14-5〕、朝顔形埴輪〔図17-48・49〕の一部を検出している。前庭部中央から前方にかけては横瓶〔図36-4〕の1個体分の破片および土師器環の細片が広く散乱していた。また、右側擁壁先端部根石のやや前方にフラスコ形長頸壺〔図36-3〕1点

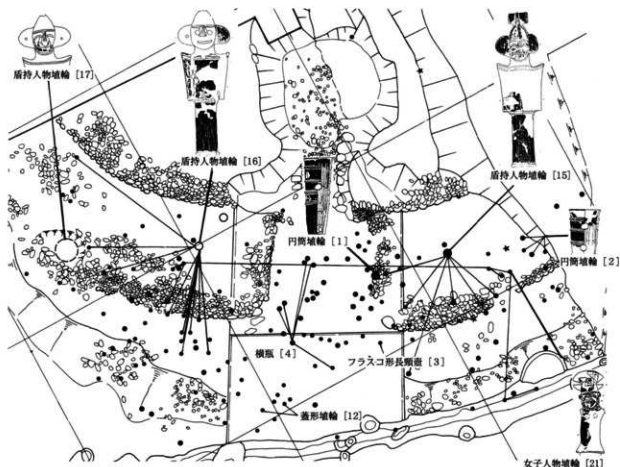


図13 前庭部周辺遺物出土位置図

が出土した。さらに、前庭部と周堀の中間地点において蓋形埴輪一部を検出した。

そのほか、墳丘南側を中心に各所で円筒埴輪、朝顔形埴輪の破片が出土しているが、同一個体が広範囲に散在することから、後世の擾乱などによる移動が著しいものと判断され、原位置を想定し得るだけの有意なまとまりは認められなかった。

b. 埴輪

円筒埴輪 [1~47] (図14~17、写真8~11)

円筒埴輪は4条突帯5段構成の大型品 [図14・15-1・2・10・11] と2条突帯3段構成の小型品 [図14-3~6] とに大別され、2条突帯3段構成の小型品は、さらに第2段幅の広いもの [3・6] と狭いもの [4・5] とに分類される

外面調整はいずれも1次タテハケのみで、2次調整を欠いている。底部調整は小型品にのみ認められ、大型品には施していない。調整はすべて板押圧によるもので、範囲は第1段の中位にまで及んでいる。

内面調整はタテナデないしナメナデ及びナメハケによる。ナデ調整は個体によりやや粗雑なものがあり、輪積痕を明瞭に残す例も認められる [2・3・6]。ナメハケは大型品では第4段以上、小

型品では第2段以上にほぼ限定される。口縁部は内外面・端面ともヨコナデが施される。

突帯は断面形が崩れた台形を呈するものが大半を占める。6のように断面形が三角形を呈するものがわずかに含まれる。

透孔はすべて円形である。4条突帯5段構成の大型品は第2・3・4段の各段に、一対を90°づつ角度を違えながら穿っている。段中の穿孔位置は個体により若干異なる。第2段では1・2ともに第2突帯に近く、突帯下のヨコナデを切って穿孔しているのに対し、第3段では、1が第2突帯に近く突帯下のヨコナデを切って穿孔し、2は段の中央に穿孔している。また、第4段では1が段の中央に穿孔しているのに対し、2では第3突帯に近く、突帯上のヨコナデを切って穿孔している。2条突帯3段構成の小型品は、円形透孔一対を第2段に対向して穿っている。ただし、3・6のように第2段幅の広い類では、やや縦長の円形を呈する。穿孔位置は段のほぼ中央にある。

線刻は多様である。1・2などの大型品では第4段の外面に透孔と90°角度を違えて、斜め右下がりの直線状の線刻を2条刻んでる。小型品では、8のように第3段の外面に崩れた「C」字状のもの、5のように第2段の内面に弧状のものや9のように直線上のものがみられる。

胎土は全体に細砂粒を含有しているが、大型品には角閃石安山岩を含むのに対し、小型品には角閃石安山岩を含まず大型品には認めない片岩を含むという相違点がある。海面骨針を含むもの、チャートを含むもの、砂礫を多量に含むものも少数存在する。

焼成は個体に関係なく総じて良好である。また、還元焼成の資料がわずかに認められる [27・28]。色調は大型品がにぶい橙色ないし橙色を呈し、全体に彩度に欠くのに対し、小型品は赤褐色ないし明赤褐色もしくは橙色を呈して明るく鮮やかな発色を示す傾向にある。還元焼成の資料は灰オリーブ色を呈する。

朝顔形埴輪 [48~54] (図17・18、写真11・12)

朝顔形埴輪は全形の判明する資料が存在しない。口縁部には大きく外彎しつつ広がるものと、中に膨らみをもち口唇近くで小さく外反するものがある。また、確証はないが、口縁部が直線的に開く形態の15・16も朝顔形埴輪の可能性が有る。肩部は全体に張りか緩やかで、頸部もくびれが小さく、径が大きい。胴部は50や朝顔形埴輪の可能性が考えられる12などから寸胴と推定する。

外面調整はいずれも1次タテハケのみで、2次調整を欠いている。肩部の調整もすべて1次タテハケのみである。

内面調整は胴部から肩部にかけてがタテナデないしナメナデ、肩部から頸部、口縁部下半にかけてがナメナデないしナメハケで、口縁部の上位はすべてナメハケで占められている。口縁部は内外面・端面ともヨコナデが施される。

突帯は断面形が台形を呈するものが大半を占める。円筒埴輪に比べ稜も明瞭で、器面へのナデつけも丁寧に施している。

透孔は遺存する個体が少数であるが、判明する範囲ではすべて円形である。肩部直下の段では段中の上位にあって、肩部とを画する突帯のヨコナデを切って穿孔している。

線刻はとくに目立たないが、朝顔形埴輪の口縁部の可能性も考えられる15には、内面に大型の「×」状線刻を認める。

胎土は円筒埴輪と比較して、砂礫を多く含むものが目立つ [48~52・54]。また、円筒埴輪1・2のよ

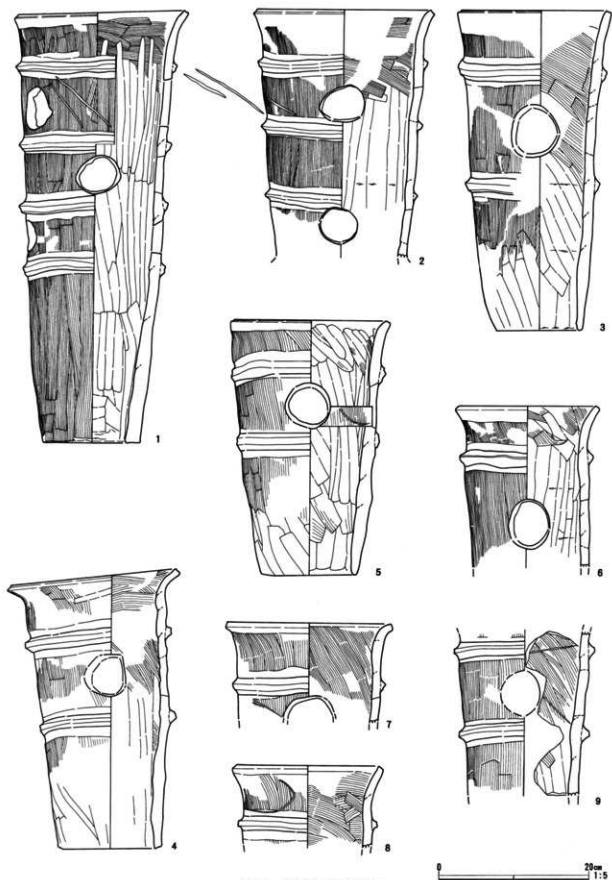


图14 円筒埴輪実測図(1)

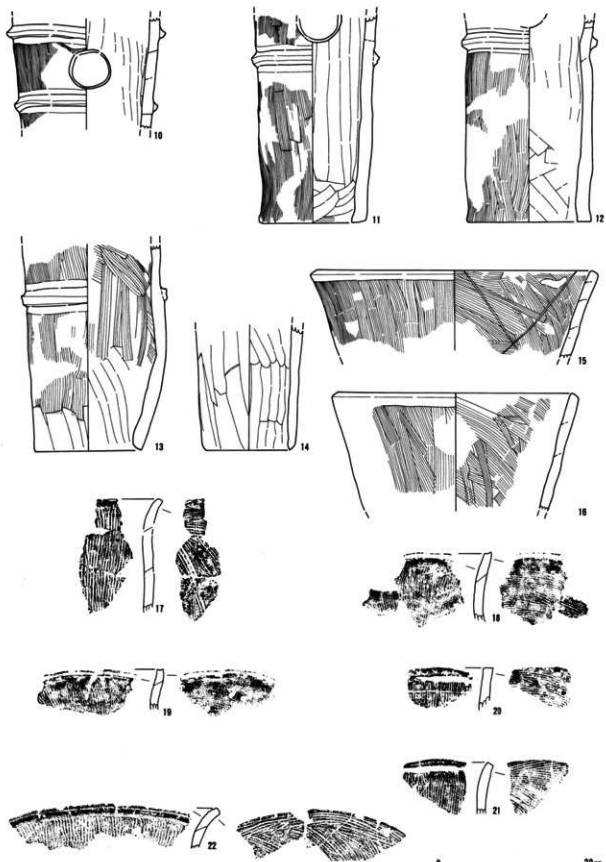


图15 円筒埴輪夾測図・拓影図2)



图16 円筒埴輪拓影(3)



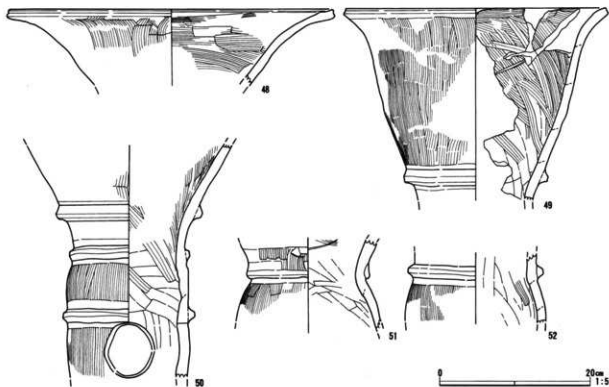
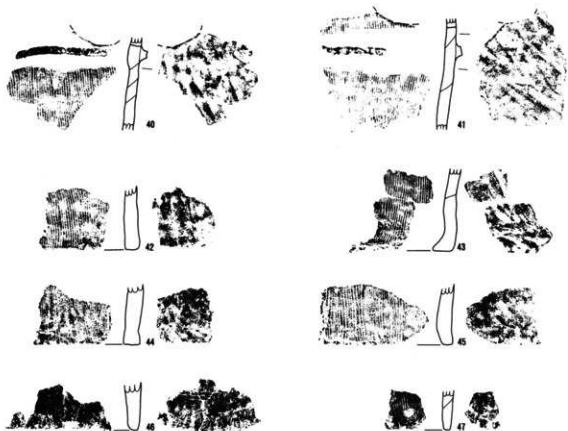


图17 円筒・朝顔形埴輪突測図・拓影図(4)



図18 朝顔形埴輪実測図・拓影図(5)

うに角閃石安山岩を含むものは認めないが、53・54などには片岩の含有が観察される。

焼成は個体に関係なく総じて良好である。還元焼成の資料は認められない。

色調は明赤褐色ないし橙色を呈するものがほとんどで、小型品の円筒埴輪の色調に近い。

形象埴輪 (図19～35、写真12～17)

家 [1～11] (図19・20、写真12)

1・2は妻側の壁面と推測される。横方向に緩やかな湾曲を示し、中央に円形透孔を配する。1は円形透孔の下に横方向に幅広の粘土帯を貼付している。調整は内外面とも縦および斜め方向のハケで、1では粘土帯の中央にヨコハケ、縁辺周辺にヨコナデを加えている

3・4は壁部の角である。横方向に湾曲した本体を成形したのち、縦方向に断面三角形の幅広の粘土帯を貼付して壁部の角を造形している。調整は内外面とも縦および斜め方向のハケで、内面には一部にナデを加えている。

5～7も壁の一部である。5は縦方向に突帯状の粘土を貼付している。外面調整はナデ、内面はハケであるが摩耗が著しい。6は湾曲の度合いが低いものの、縦方向に断面三角形の幅広の粘土帯を貼付していることから、3・4と同様な壁部の角にあたる可能性が考えられる。外面調整はタテハケで、粘土帯とその周辺は縦方向のナデ、内面調整は不明瞭で確認できない。7はわずかに弧状となる部分の外面に縦方向の粘土帯を貼付した痕跡を残す。外面調整はタテハケのちなナメナデ、内面調整はナメハケでやや摩耗している。

8は壁面とそこに設けられた出入り口の一部である。壁体をヘラ状工具で切り抜いて出入り口を表現している。出入り口の形状は、残存する部位の上下の端がやや湾曲することから隅丸で縦長の方形になると推定される。調整は、外面がタテハケ、内面がナメハケである。

9～11は壁の基底部分で、9・10は下端に横方向に幅広の粘土帯を貼付している。外面調整は、粘土帯貼付前にタテハケを施したのち粘土帯とその周辺にナデを加えている。内面調整はタテナデおよびヨコナデである。

胎土はほとんどすべての破片に角閃石を含むほか、4・6には石英を認める。焼成はいずれも良好で、色調は橙色からにぶい黄橙色を呈する。

蓋 [12] (図20、写真12)

やや異形ではあるが、類似事例の存在から蓋の可能性を考えている。細長い円筒状の体部をもち、わずかに残る上端には剝離痕を認めることから、この部分に笠部がのるものと推定される。体部には斜め上方からヘラ状工具による長楕円形の穿孔が存在する。現状で穿孔位置には明瞭な規則性を認めないが、斜位に並列を意識している可能性がある。調整は、外面がタテハケ、内面がナデで、笠部と

前の山古墳 円筒・朝顔形埴輪観察表

番号	法 量 (cm)					突 帯		透 孔		口縁部 調 整	外面調整			内面調整			底 部		焼成 色 調	残存 率	備 考			
	口徑	底徑	側高	第1段	第2段	第3段	第4段	第5段	幅		高さ	形制	径	調整	ハケ本数 (/2cm)	基部	調整	基部				巻き	圧痕	
1	22.0	12.6	57.4	23.0	8.4	8.0	10.4	7.6	2.2	0.8	円	5.2×6.0	ヨコナデ	1次タテハケ	12本	—	ナナメハケ・タテナデ	—	右	—	良好	褐色	95%	外面第4段に斜位2条の線刻。角閃石安山岩粒を含む。
2	(23.0)	—	—	—	—	9.6	8.2	7.3	1.9	0.6	円	(5.1)×6.1	ヨコナデ	1次タテハケ	12本	—	ナナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	褐色	30%	外面第4段に斜位2条の線刻。角閃石安山岩粒を含む。
3	(19.4)	11.0	42.3	19.2	14.7	8.4			2.3	0.8	円	(8.1×6.5)	ヨコナデ	1次タテハケ	9本	板押圧	ナナメハケ・ナナメナデ	—	—	—	良好	明褐色	60%	片岩を含む。
4	(21.8)	13.6	37.0	17.4	11.3	8.3			2.1	0.9	円	(5.6×5.5)	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	板押圧	ヨコハケ・ナナメハケ・タテナデ	—	右	棒状	良好	明赤褐色	70%	片岩・海綿骨針を含む。
5	20.0	12.7	33.7	17.9	8.7	7.1			2.6	0.8	円	(6.1×6.1)	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	板押圧	タテナデ	—	右	—	良好	褐色	85%	外面第2段に線刻。片岩を含む。
6	18.0	—	—	—	—	6.8			2.0	0.8	円	(6.5)×5.5	ヨコナデ	1次タテハケ	10本	—	ナナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	50%	角閃石安山岩粒を含む。
7	21.5	—	—	—	—	8.1			1.9	0.7	円	—×6.9	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	褐色	15%	片岩を含む。
8	(18.7)	—	—	—	—	7.7			1.8	0.8	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	にぶい褐色	10%	外面第3段に線刻。片岩を含む。
9	—	—	—	—	11.2	—			2.5	1.0	—	—	—	1次タテハケ	6本	(板押圧)	ナナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	明褐色	25%	内面に線刻。片岩・海綿骨針を含む。
10	—	—	—	—	—	9.7	—	1.8	0.8	円	(5.1×5.5)	—	1次タテハケ	12本	—	タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。	
11	—	14.2	—	21.7	—	—	—	2.2	0.8	—	—	—	1次タテハケ	12本	—	タテナデ	—	右	棒状	良好	褐色	20%	角閃石安山岩粒を含む。	
12	—	(16.3)	—	22.5	—	—	—	2.2	0.8	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	タテナデ・ナナメナデ	—	右	—	良好	明赤褐色	15%	砂礫を多く含む。朝顔形か。	
13	—	14.0	—	20.7	—	—	—	2.1	0.7	—	—	—	1次タテハケ	7本	板押圧	タテハケ・タテナデ	—	右	—	良好	にぶい黄褐色	20%	砂礫を多く含む。	
14	—	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	—	板押圧	タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	10%	片岩を含む。	
15	(36.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	6本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	褐色	10%	内面に「×」の線刻。片岩を含む。朝顔形か。	
16	(30.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	6本	—	ナナメハケ・タテハケ	—	—	—	良好	褐色	10%	片岩を含む。朝顔形か。	
17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	6本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	褐色	5%		
18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ヨコハケ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	片岩を含む。	
19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	片岩を含む。	
20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	片岩を含む。	

番号	法 量 (cm)					突 帯 幅 高さ	透 孔 形 態 径	口縁部 調 整	外面調整		内面調整		底 部		焼成 色 調	残存率	備 考						
	口径	底径	器高	第1段	第2段				第3段	第4段	第5段	調整	ハケ本数 (/2cm)	基部				調整	基部	巻き	圧痕		
21	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ヨコハケ・ナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	内面に線刻。 片岩を含む。			
22	(32.8)	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	5本	—	ヨコハケ・ナメハケ	—	—	—	良好	褐色	5%	砂礫を多く含む。			
23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	ナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	褐色	5%				
24	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	8本	—	ナメハケ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	片岩を含む。			
25	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ・ヨコナデ	8本	—	ナメハケ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	片岩を含む。			
26	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	10本	—	ナメハケ・ヨコハケ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%				
27	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	6本	—	ナメハケ・タテハケ・タテナデ	—	—	—	良好	灰オリーブ色	5%	還元焰焼成。			
28	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ナメハケ	—	—	—	良好	灰オリーブ色	5%	還元焰焼成。			
29	—	—	—	—	—	—	—	(円)	—	1次タテハケ	5本	—	ナメハケ	—	—	—	良好	褐色	5%	片岩を含む。			
30	—	—	—	—	—	—	2.5	0.8	(円)	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。砂礫を多く含む。
31	—	—	—	—	—	—	1.9	0.9	—	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナメハケ・ナデ・指頭圧痕	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。
32	—	—	—	—	—	—	2.2	0.7	円	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。砂礫を多く含む。
33	—	—	—	—	—	—	1.9	0.6	円	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	ナメハケ・ナメナデ	—	—	—	良好	褐色	5%	砂礫を多く含む。
34	—	—	—	—	—	—	2.5	0.7	円	—	—	—	1次タテハケ	13本	—	ヨコハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
35	—	—	—	—	—	—	2.1	0.6	—	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	ナメナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。砂礫を多く含む。
36	—	—	—	—	—	—	—	0.8	(円)	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	ヨコハケ・ナメナデ・指頭圧痕	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	片岩を含む。
37	—	—	—	—	—	—	1.8	1.1	—	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	ヨコハケ・ナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。砂礫を多く含む。
38	—	—	—	—	—	—	2.0	0.6	(円)	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
39	—	—	—	—	—	—	1.8	0.4	—	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナメナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	
40	—	—	—	—	—	—	2.5	1.1	(円)	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	ナメナデ・指頭圧痕	—	—	—	良好	明黄褐色	5%	砂礫(チャート)含む。

番号	法 量 (cm)								突 帯		透 孔		口縁部 調 整	外面調整			内面調整		底 部		焼成	色 調	焼成率	備 考
	口径	底径	器高	第1段	第2段	第3段	第4段	第5段	幅	高さ	形態	径		調整	ハブ本数 (1/2cm)	基部	調整	基部	巻き	圧痕				
41	—	—	—	—	—	—	—	2.6	0.9	(PI)	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナナメナデ・指頭 圧痕	—	—	—	良好	明褐色	5%	砂礫(チャート)含む。	
42	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	タテナデ	—	—	木目状	良好	にぶい黄褐色	5%		
43	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	ナナメナデ・指頭 圧痕	—	—	棒状	良好	明褐色	5%		
44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	ナナメナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。砂礫を多く含む。	
45	—	(15.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	ナナメナデ	ヨコケ ズリ	—	—	良好	褐色	5%	片岩を含む。砂礫を多く含む。	
46	—	(14.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	板押圧	ナデ	木目 圧痕	—	木目状	良好	にぶい赤褐色	5%		
47	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナデ	—	—	—	良好	褐色	5%	片岩を含む。	
48	(44.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	6本	—	ヨコハケ	—	—	—	良好	褐色	5%	朝顔形。 砂礫を多く含む。	
49	(34.2)	—	—	最上段(第6段):22.6				2.3	1.0	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	10%	朝顔形。内面に線刻。砂礫を 多く含む。	
50	—	—	—	(第4段):8.0		(第5段):5.4		2.3	0.9	円	(7.3)×6.8	—	1次タテハケ	6本	—	ナナメハケ・タテ ナデ	—	—	—	良好	褐色	30%	朝顔形。 砂礫を多く含む。	
51	—	—	—	—	—	—	—	2.2	0.5	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ・ナナ メナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	10%	朝顔形。 砂礫を多く含む。	
52	—	—	—	—	—	—	—	2.0	0.8	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	10%	朝顔形。 砂礫を多く含む。	
53	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	タテナデ	—	—	—	良好	褐色	10%	(朝顔形)。片岩を含む。	
54	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	5本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	(朝顔形)。片岩を含む。砂礫 を多く含む。	

の境界にあたる体部上端の外面にはユビオサエを加えている。胎土に角閃石、石英を含む。焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。

大刀 [13・14] (図20、写真12)

いずれも護拳部の破片である。13は護拳部の下端にあたり、表面に「V」字状の線刻がある。調整は、表面がハケおよびナデ、裏面は全面がハケである。端面にはナデを施している。胎土に角閃石安山岩を含む。焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。14は護拳部の中間部位と考えられる。調整は、表面がハケおよびナデ、裏面がハケで全体に剝離面となっている。端面には同様にナデを施している。胎土に片岩を含む。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

盾持人物 [15～20] (図21～29、写真13～16)

15は笑う表情の盾持人物である。台部から盾の一部および頭部が残る。台部は最下端に太めの突帯をめぐらし、やや径を減じながら盾部との境界に至る。盾部との境界には1条の突帯をめぐらし、右側方には突帯直下に円形透孔を配している。左側は欠失して確認できないが、同様の透孔が対をなして存在したと考えられる。盾は台部から連続し成形している円筒の本体の側方に、薄い方形の粘土板を鱗状に突出させて表現している。盾表面には線刻・彩色その他の装飾を認めない。顔面は円筒形の頭部本体に、分厚い半月形の粘土板を斜め下方から貼付し輪郭を形成している。顎を形成する半月形の粘土板と頭部本体との間には別の粘土塊を充填して強度を保持している。鼻は大きく突出する鷲鼻で、上端部で太い眉に連続している。口は顎の左右外縁部近くまで大きく弧状に切り抜いている。切開面には上下に3対のわずかな窪みを認め、本来存在した何らかの部品が脱落した痕跡と推定される。目は弧状に大きく切り抜かれ、目尻が大きく下がり、口の表現と合わせ、笑う表情となっている。耳は半月形の大型粘土板を椀状に成形し、窪んだ側を前方にして頭部側方に貼付している。左右とも中央に小円孔を穿っている。頭頂部には大型で中空の円筒状の部品が付く。円筒状の部品から、前後の頭部にかけて、長く粘土紐が垂下し、その表面に連続する「V」字状の線刻を加えて緒を表現している。前頭部へ続く緒は上額部で3本に分岐し、額中央と左右側額部を経て眉の近くまで伸びる。後頭部側は、幅を広げながら直線的に後頸の破断部まで伸びている。

外面調整は、台部がタテハケ、盾部がタテハケおよびナデ、頭部がタテハケののち一部不定方向のナデ、耳は内外面とも不定方向のハケである。内面調整はタテハケおよびナメハケののちタテナデおよびナメナデを加えている。

胎土には砂礫を含み、焼成はやや軟質で、色調はにぶい褐色を呈する。

16は丸い目の盾持人物である。台部と盾の中央から右端にかけて、鼻の周辺および左耳が残る。台部は最下端に太めの突帯をめぐらし、径を変えることなく盾部との境界に至る。盾部との境界には1条の突帯をめぐらし、左右の側方には突帯からやや離れて一對の円形透孔を配している。盾は台部から連続し成形している円筒の本体の側方に、薄い方形の粘土板を鱗状に突出させて表現している。盾の形状は、側縁が下端から上端へ緩やかな弧を描いて広がりながら立ち上がり、上縁は左右の角が上方に反り上がる。また、上縁やや下方に突帯状の粘土紐を1条付加している。盾表面には、これ以外に、線刻・彩色その他の装飾を認めない。鼻は15と同様に大きく突出する鷲鼻で、上端部で太い眉に連続している。鼻の下面にヘラ状工具による刺突を加え、鼻孔を表現する。目は鼻側部に残存する形状から円形を呈していたものと推測する。耳も15と同様に半月形の大型粘土板を椀状に成形し、窪ん

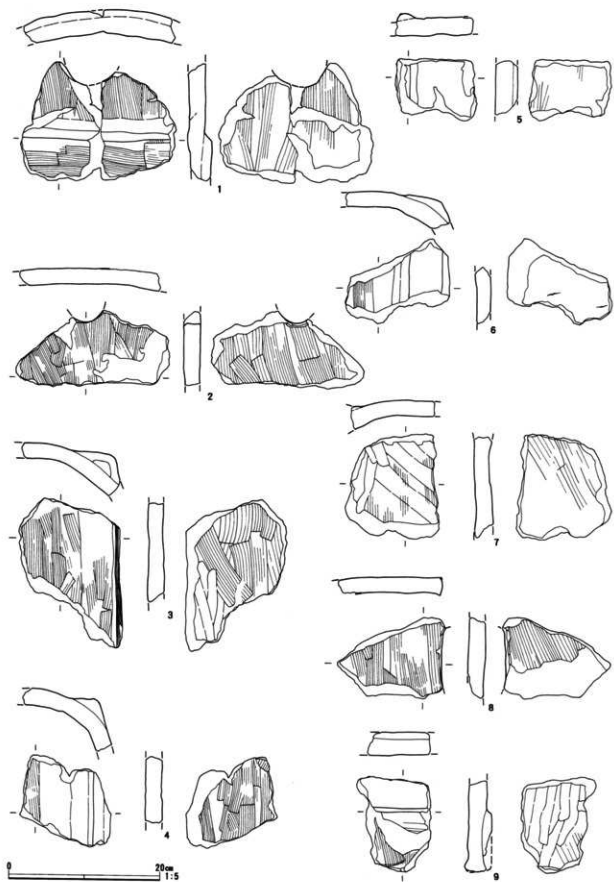


图19 形象埴輪突測図(1)

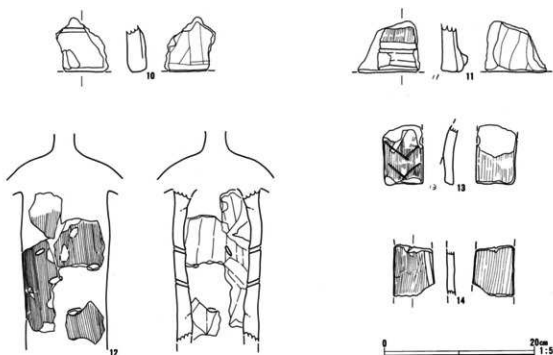


図20 形象埴輪実測図(2)

だ側を前方にして頭部側方に貼付している。同じく中央に小円孔を穿っている。

外面調整は、台部がタテハケ、盾部中央がタテハケ、盾部右側がヨコハケ、鼻がナデ、耳が内外面とも不定方向のハケである。内面調整はタテハケおよびナメハケののちタテナデおよびナメナデを加えている。

胎土には砂礫を含み、焼成はやや軟質で、色調はにぶい褐色を呈する。

17は笑う表情の盾持人物である。顎から口にかけてと、目、鼻の一部が残るのみである。頭部本体に、分厚い顎は半月形の粘土板により成形しているが、頭部本体からは完全に剝離している。鼻は15・16と同様に大きく突出する。口は「V」字状に切り抜かれ、15と同じく開面には上下に3対の窪みを認める。本来存在した何らかの部品が脱落した痕跡と推定される。目は大きく下方に湾曲する右目下縁のみ残る。原形は15のように目尻が大きく下がり、笑う表情を示していると考えられる。

外面調整は、顎がタテハケ後ナデ、他が不定方向のナデである。内面調整はほとんど観察できないが、不定方向のナデを認める。

胎土には砂礫を含み、焼成はやや軟質で、色調はにぶい褐色を呈する。

18は盾持人物の盾の右上角の破片である。端部が斜め上方に反り上がり、上端には突帯状の粘土紐を貼付する。表面の調整は不定方向のハケののち突帯周囲にナデを加えている。裏面の調整は不定方向の粗いハケののち同じく不定方向の粗いナデを施して。胎土に砂礫を含む。焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。

19は盾持人物の盾の一部で、円筒の端からその外側の罎状部にかけての部位である。調整は、表面が縦方向の粗いハケ、裏面が粗いナデ、内面が不定方向の粗いハケおよびナデである。胎土に砂礫を含む。焼成はやや軟質で、色調はにぶい褐色を呈する。

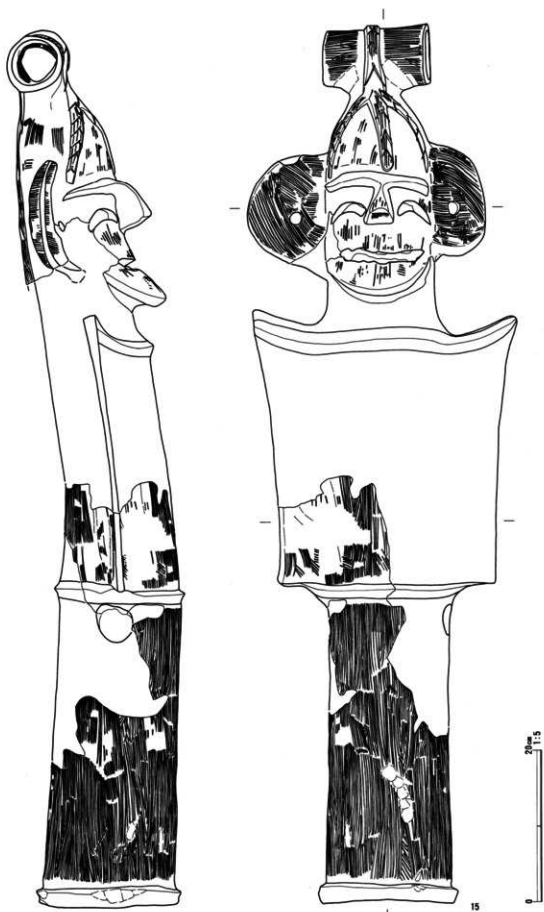


图21 形象埴輪実測図(3-1)

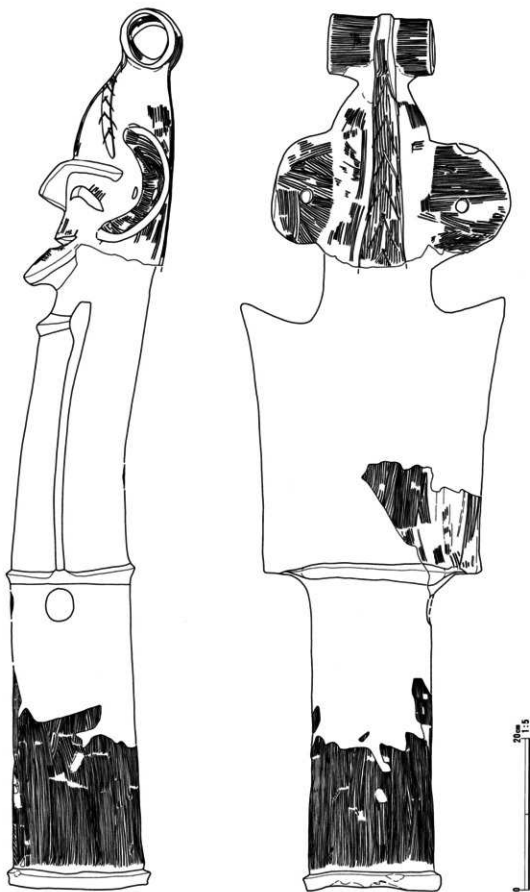


图22 形象埴輪突刺图(3-2)

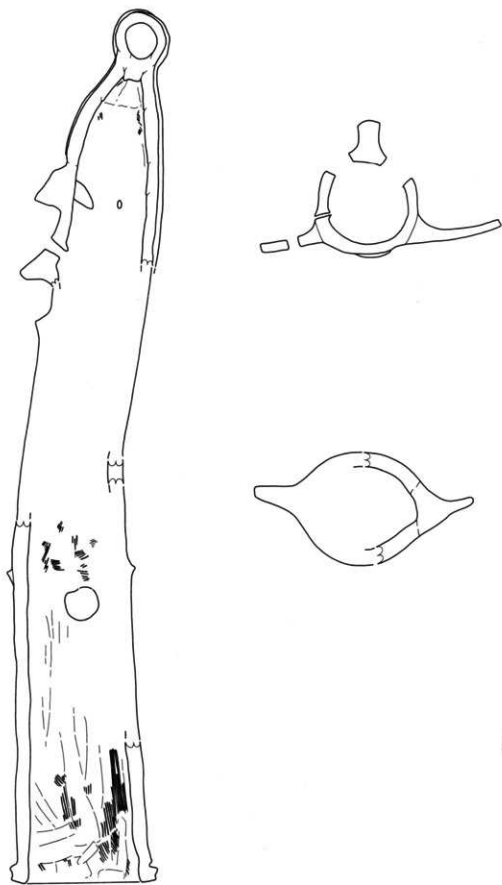


图23 形象埴輪実測図(3-3)

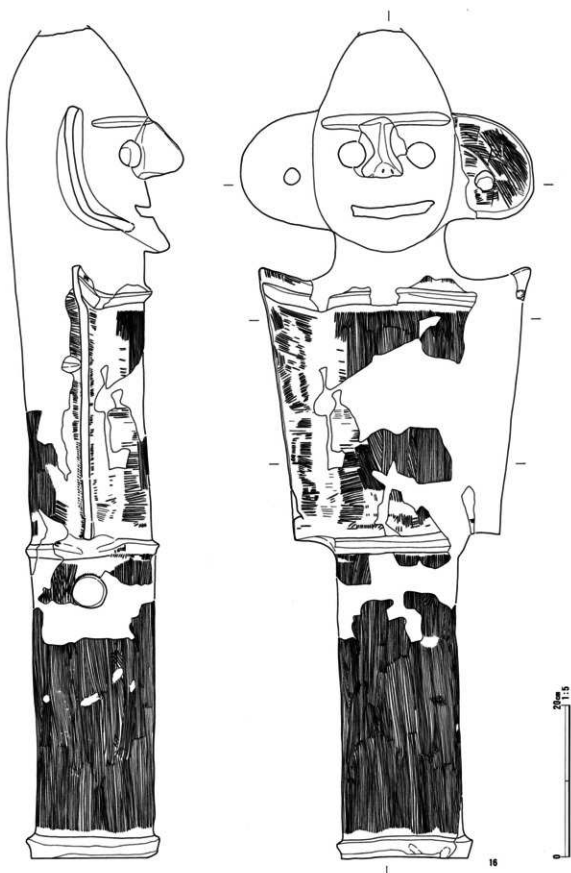


图24 形象埴輪実測図(4-1)

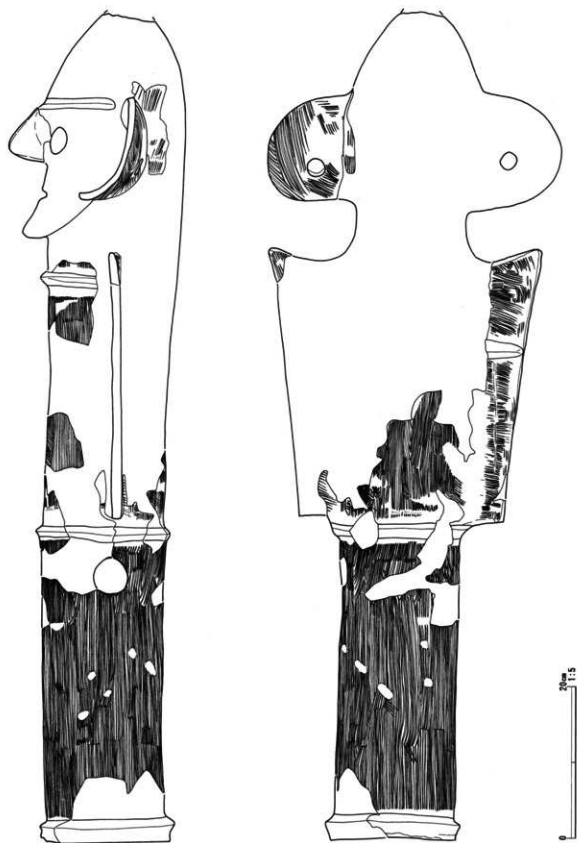


图25 形象埴輪実測図(4-2)

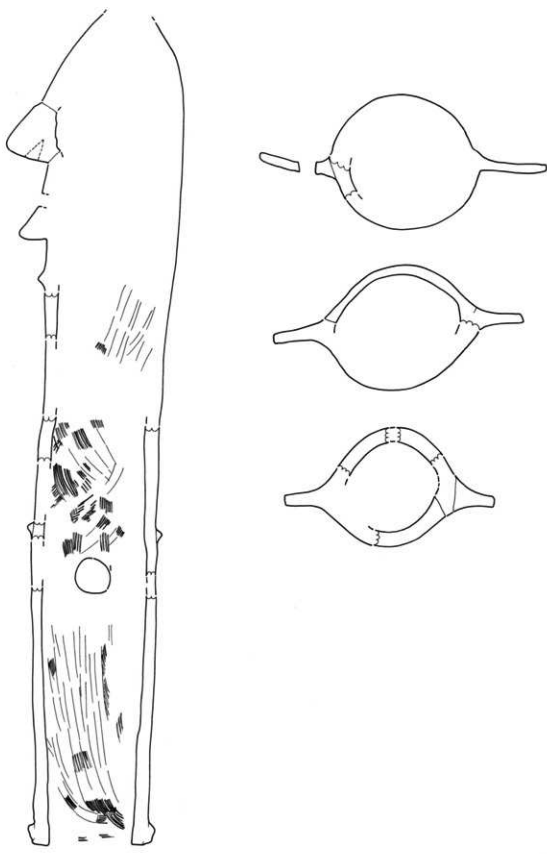


图26 形象埴輪実測図(4-3)

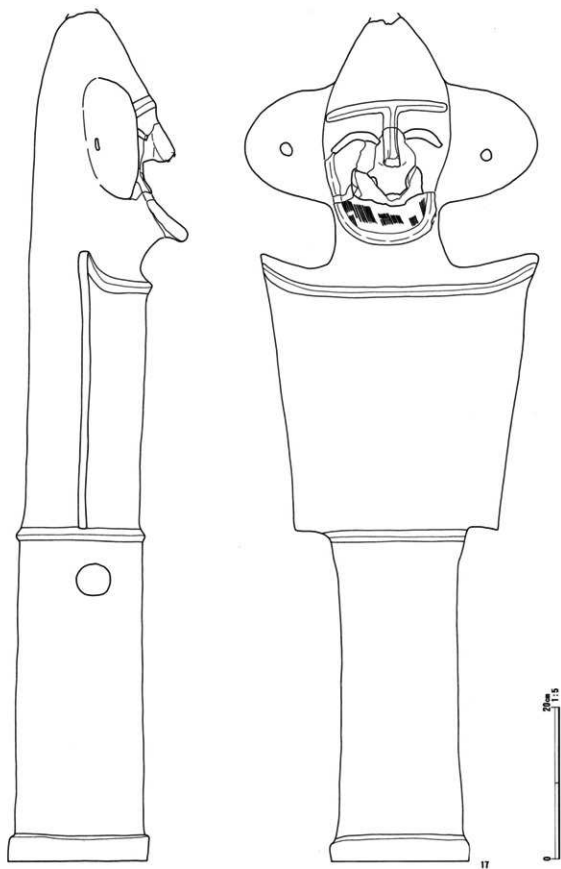


图27 形象埴輪実測図(5-1)

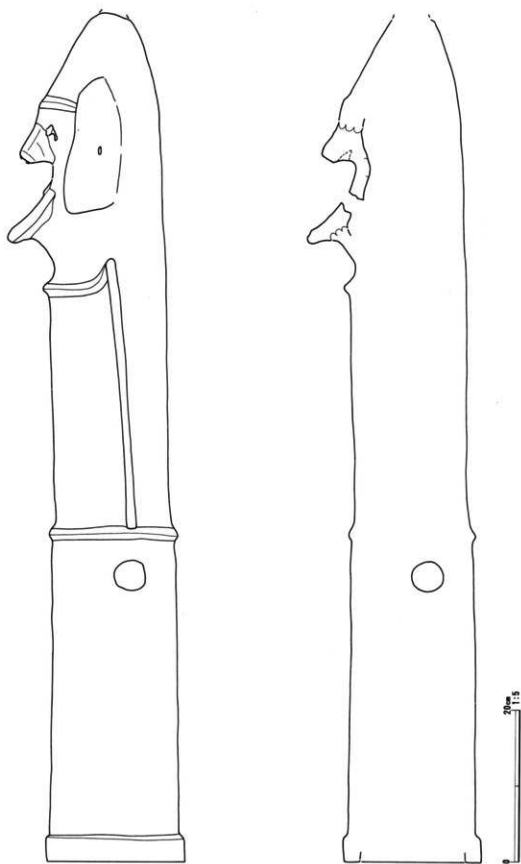


图28 形象埴輪実測図(5-2)

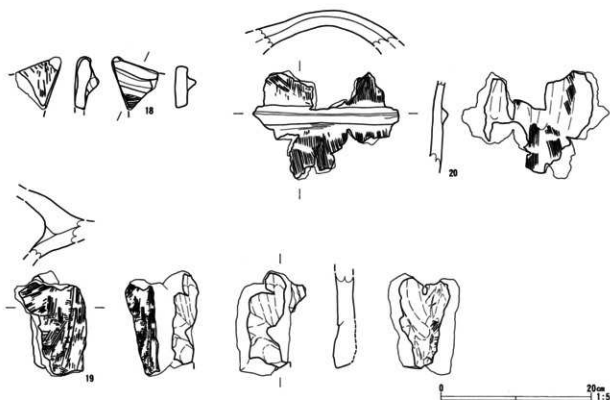


図29 形象埴輪実測図(6)

20は盾持人物裏側の本体と上部の境界部である。器壁が薄く、断面三角形に近い突帯をめぐらせている。外面調整は粗いタテハケ、内面調整はタテハケおよびタテナデである。胎土に砂礫を含む。焼成はやや軟質で、色調はにぶい褐色を呈する。

女子人物 [21] (図30~32、写真16・17)

首をやや右に傾け、表情に笑みを浮かべる女子人物である。右側胴部と上胸部から頭部、髷の前半部にかけてが残る。頭部はほとんど括れず、そのままの太さで頭部へ以降している。胴部には、着衣、帯、袴状装飾の表現を認めない。頸部には円板状粘土を連続貼付し首飾りを表す。密度は頸部右側から正面にかけては高く、頸部左側ではやや粗い。顔面は円筒状に成形した頭部本体にU字状の粘土板を添付することにより輪郭を形成している。鼻は上端部がわずかに遺存するのみであるが、鼻筋が明瞭で高く立体的な表現であったと考えられる。鼻孔は剝離部下端に残る痕跡から、ヘラ状工具を用いた刺突により、2本の筋状を呈するものであったと推定される。眉は左耳上部から右耳上部まで、1本の直線的な粘土紐を貼付して立体的に表している。中央では鼻梁の上端に重複する。口は小さく直線的に切り抜かれている。目は弧状に切り抜かれ、目尻が大きく下がり笑みを湛える表情となっている。耳は立体的に造形し、前後に粘土粒を貼付して耳玉を表現している。耳穴は左右とも存在し、ヘラ状工具により三日月形に穿孔している。耳の下方には環状の粘土紐を貼付し耳輪を表す。額上部には、線刻を加えた粘土板を貼付し、櫛を表現する。髷は残存部位の形状から、原形は分銅形を呈するものと推定される。

外面調整は、胴部が縦方向のハケ、頸部以上が粗いハケのち不定方向のナデを加え、内面調整は、

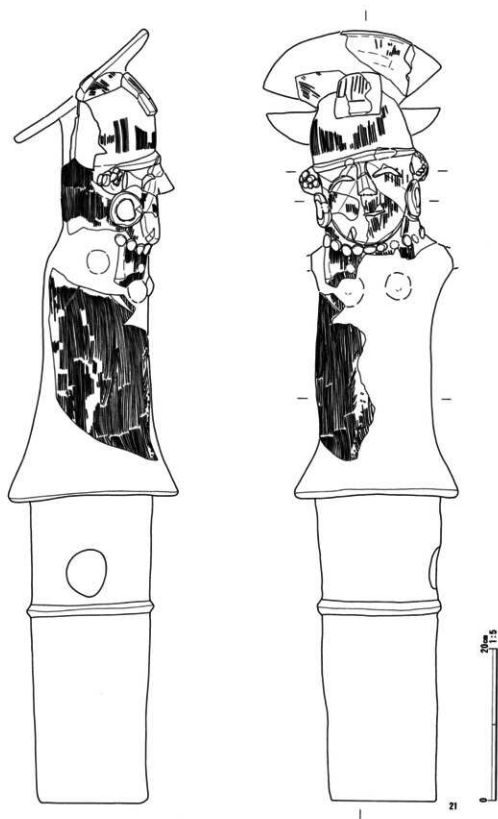


图30 形象埴輪実測図(7-1)

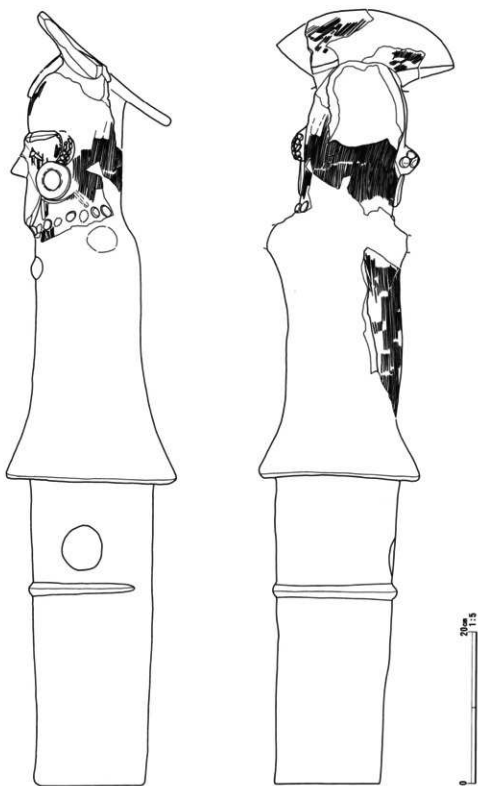


图31 形象填轴实测图(7-2)

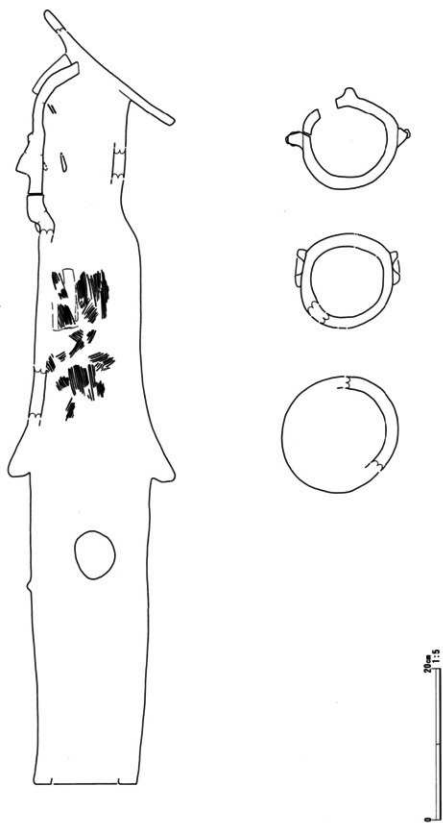


图32 形象埴輪実測図(7-3)

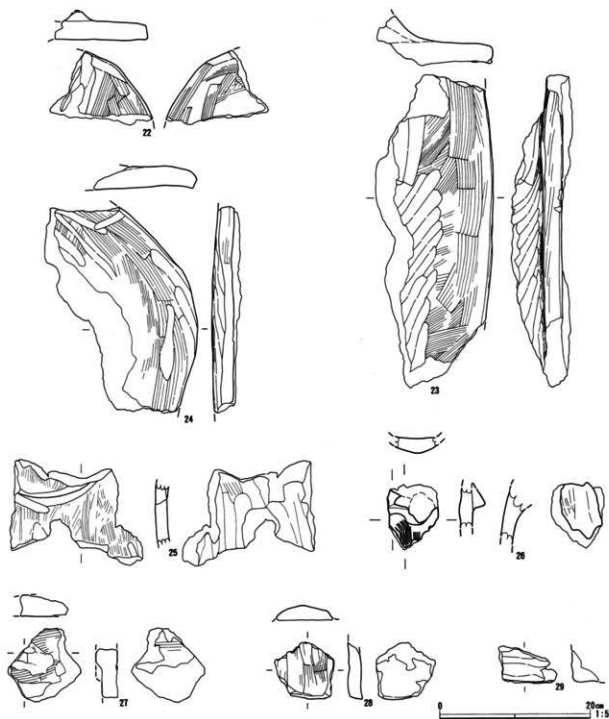


図33 形象埴輪実測図(8)

胴部が粗いナデののち不定方向の粗いハケ、頸部以上が粗いナデである。胎土に砂礫を含む。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

馬 [22] (図33)

後輪の右半の一部である。弧形の平板な粘土板を造形して鞍橋を表し、その後面に断面台形の粘土紐を貼付して尻繫の革紐を表現している。粘土帯は後輪の上縁にまで達している。調整は前後面とも

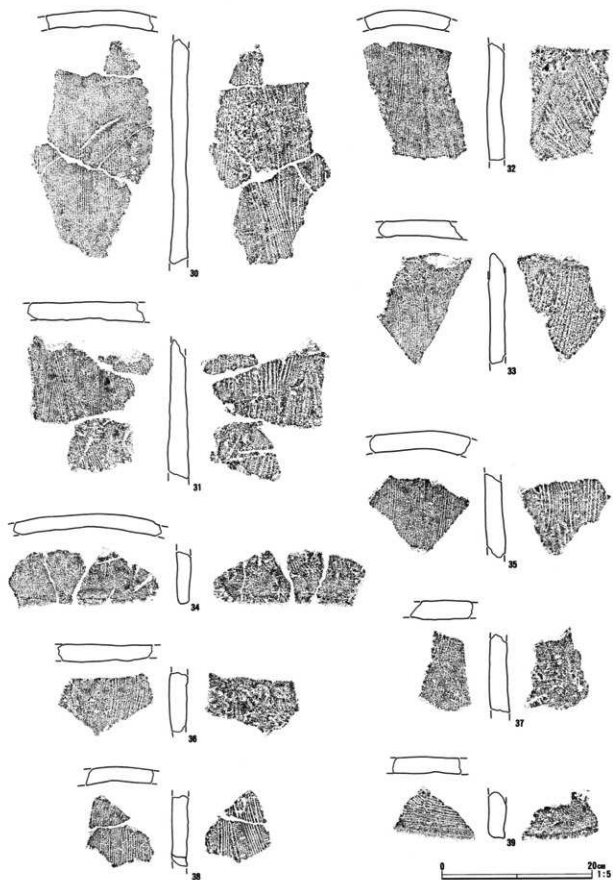


图34 形象墙轴拓影(9)

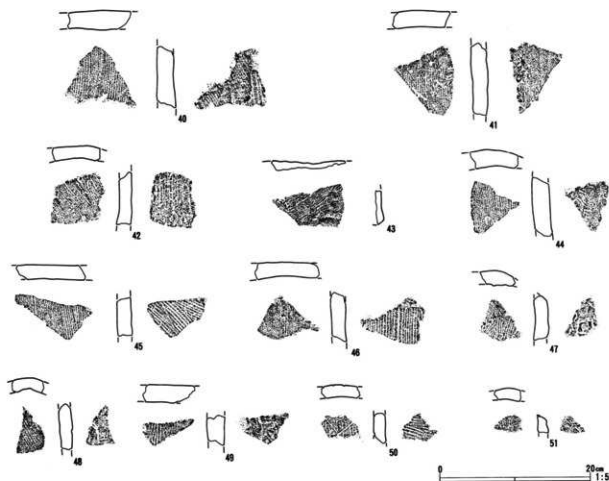


図35 形象埴輪拓影図⑩

不定方向のハケで、端面にはナデを施しているほか、尻繫を表す粘土紐にもナデを加えている。胎土には角閃石を含む。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

器種不明 [23~51] (図33~35)

いずれも器種を特定できない破片である。

23は平板な造りで、端部が弧状を描き、反対側には斜め方向の剝離痕が存在する。調整は表裏面ともハケおよびナデである。

24も平板な罫状の部品である。端部が緩やかな弧を描き、全体も上下方向にわずかな反りがある。端部と反対側の破断面の近くでは、粘土板本体の片側にさらに粘土を重ねて急激に厚みを増し、本体へと連続するものと考えられる。調整は端部から罫状部までがハケ、粘土を重ね厚みを生じている部分はナメナデである。

25は太めの円筒部本体に対し、粘土を弧状に貼付してナデを加えている。26~29は部分的に立体的な造形を認めるが器種の推定までには至らない。30・31などは平板な破片で、家形埴輪の屋根部、壁体部の可能性を残すが確証はない。32・35のように横断面がわずかに弧状を呈するものも含まれる。34は下縁が角の丸い端面となっている。38には透孔状の穿孔を認める。

c. 土器 (図36、写真18)

土師器坏 [1・2]

底部は丸底で、湾曲する深めの体部をもつ。1の口縁部は内屈気味に立ち上がるのに対し、2は直立気味に立ち上がる。外面調整は底部から体部にかけてヘラケズリを施し、口縁部にヨコナデを加える。内面調整は底部が不定方向のナデ、体部から口縁部まではヨコナデを施す。胎土に角閃石、礫を含み、焼成は良好である。色調は、1がにぶい褐色、2が橙色からにぶい橙色を示す。

須恵器フラスコ形長頸壺 [3]

球状の体部にやや短めの頸部がつく。口縁部は外湾し、口唇部の稜が明瞭で端面を形成する。調整は、全体にロクロ整形により、体部には回転ヘラケズリを加える。胎土に多量の砂礫を含む。焼成は硬緻である。外面に自然軸がかかる。内外面とも灰色を呈する。

須恵器横瓶 [4]

大きく膨らんだ蘭形の体部に、外湾する短い頸部がつく。口縁部は直立し、外面には櫛描き波状文を施す。調整は、口縁部がロクロ整形により、体部は外面に平行タタキ、内面に青海波状の当て具痕を観察する。

胎土に砂礫を含み、焼成はやや軟質である。内外面とも灰色を呈する。

前の山古墳墳丘出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器坏	口径 11.0 底径 — 器高 4.0	湾曲する深い体部、内屈気味の口縁部。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	角閃石・礫 内外—鈍い褐色	3/5。
2	土師器坏	口径 11.6 底径 (3.9) 器高 —	湾曲する深い体部から、直立気味の口縁部。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	白色粒・角閃石・礫 内外—橙～鈍い橙色	1/2。
3	須恵器フラスコ形長頸壺	口径 7.9 底径 — 器高 —	球形の体部、湾曲する比較的短い頸部。	ロクロ整形、体部回転ヘラケズリ。外面に自然軸。	白色粒 内外—黄灰～鈍い黄色	3/4。
4	須恵器横瓶	口径 15.5 底径 — 器高 31.5	大きく膨らんだ体部、湾曲する短い頸部、直立する口縁部。	ロクロ整形、体部外面平行タタキ、内面同心円文。	白色粒・黒色粒・礫 内外—灰色	2/3。

(3) 墳丘下出土遺物

a. 遺物の出土状況 (図37、写真7)

石室東側墳丘下の旧表土において土器を一括で検出した。いずれも土師器で、内訳は坏、鉢、広口短頸壺計17点を一括で検出した。完形品はなく、いずれも破片となって狭い範囲に散乱していた。完全復原が可能な個体 [10] を含むものの、残存率の低い資料も多く含まれる。

b. 土器 (図38、写真18)

土師器坏 [1～14]

坏類は全体に口径が小さく、歪みを生じている個体が多いものの、体部と口縁部の稜は明瞭につくり出している。底部はすべて丸底で体部の浅いものが主体を占めるが、口縁部の形状は多様である。1～7は直線的にやや外反して立ち上がる類で、体部中央に厚みを持つものが目立つ。8～10はこれに対して直線的に大きく外反して立ち上がるタイプで、9・10はその中でもさらに口縁部中位に弱い稜

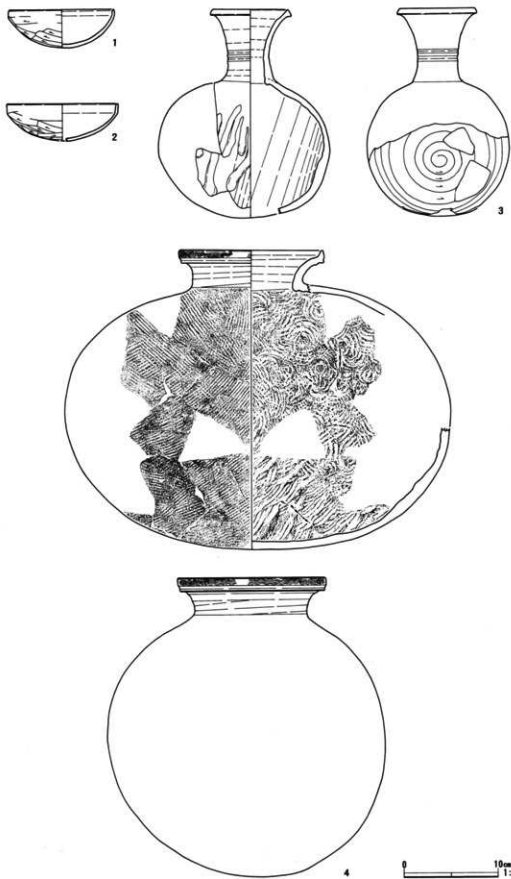


图36 墳丘出土土器実測図

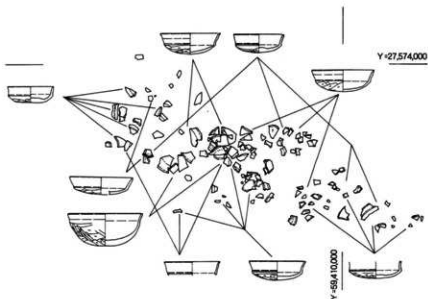


図37 墳丘下遺物出土位置図

を持つ類である。11も直線的に外反する口縁部を持つが、9・10に比べさらに浅い体部を持つ。また、12・13のように口縁部が湾曲気味に外反するタイプも存在する。いっぽう、14は丸底の底部と深い体部を持ち、口縁部がやや外反しつつ直線的に立ち上がる。外面調整はいずれも底部から体部にかけてヘラケズリを施し、口縁部にヨコナデを加える。内面調整は底部がナデないしヘラナデ、体部から口縁部まではヨコナデを施す。

胎土は礫を含むものが多く、小型品には石英・雲母が目立つ。14には角閃石が混入する。焼成は総じてやや軟質である。色調は橙色からにぶい黄橙色を呈する。3の底部外面には黒斑を認める。

土師器鉢 [15]

丸底の底部と深い体部を持ち、口縁部は短く内傾しつつ直線的に立ち上がる。外面調整は底部から体部にかけてヘラケズリを施し、口縁部にヨコナデを加える。内面調整は底部がヘラナデで、体部から口縁部まではヨコナデを施す。

胎土に黒色粒を含み、焼成はやや軟質である。色調は橙色ないしにぶい橙色を呈する。

土師器広口短頸壺 [16・17]

16は直立した高い口縁部を、17は中位に弱い稜のある内径気味の口縁部を持つ。外面調整は体部にヘラケズリを施し、口縁部にヨコナデを加える。内面調整は体部から口縁部まではヨコナデを施す。

胎土に黒色粒、礫、雲母などを含み、焼成はやや軟質で、色調は橙色を呈する。

前の山古墳墳丘下出土土器観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 環	口径 9.6 底径 — 器高 3.4	浅い体部から、口縁部は直立気味に外反。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・雲母 内外一橙～鈍い橙色	口縁部 2/5 欠損。
2	土師器 環	口径 10.6 底径 — 器高 3.9	浅い体部から、口縁部は直線的にやや外反。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	褐色粒・石英・雲母 内外一橙～鈍い橙色	3/4。
3	土師器 環	口径 (10.6) 底径 — 器高 (4.2)	浅い体部から、口縁部は直立的気味に外反。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	褐色粒・雲母 内外一橙色	2/5。

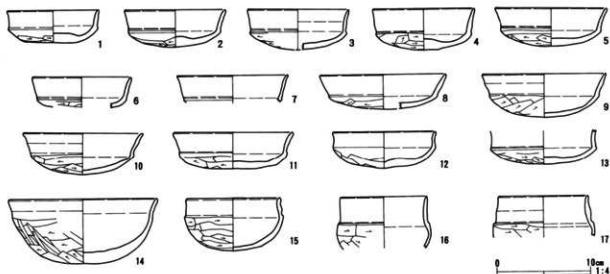


図38 墳丘下出土土器実測図

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	土師器 碗	口径 10.6 底径 — 器高 4.4	浅い体部から、高い口縁部は直線的にやや外反。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	黒色粒・礫 内外一鈍い橙色	1/2。
5	土師器 碗	口径 11.8 底径 — 器高 4.0	浅い体部から、高い口縁部は直線的に大きく外反。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	褐色粒・雲母 内外一浅黄褐色	3/4。
6	土師器 碗	口径 10.4 底径 — 器高 —	浅い体部から、口縁部は直線的にやや外反。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。	雲母 内外一鈍い黄褐色	1/6。
7	土師器 碗	口径 11.6 底径 — 器高 —	口縁部は直線的にやや外反。	外面一口縁部ヨコナデ。内面一口縁部ヨコナデ。	黒色粒・雲母 内外一鈍い橙色	口縁部1/4。
8	土師器 碗	口径 12.4 底径 — 器高 —	浅い体部から、口縁部は直線的に大きく外反。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	黒色粒 内外一鈍い黄橙 ～灰黄褐色	2/5。
9	土師器 碗	口径 13.0 底径 — 器高 4.6	深い体部から、口縁部は中に弱い稜線をもって直線的に大きく外反。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	黒色粒・褐色粒 内外一鈍い橙色	3/4。
10	土師器 碗	口径 12.6 底径 — 器高 4.4	やや深い体部から、口縁部は中に弱い稜線をもって直線的に大きく外反。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	黒色粒・褐色粒 内外一橙色	ほぼ完成。
11	土師器 碗	口径 12.6 底径 — 器高 3.9	浅い体部から、口縁部は湾曲気味に外反。底部は丸底気味。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	雲母 内外一橙～鈍い黄 橙色	1/4。
12	土師器 碗	口径 10.8 底径 — 器高 4.0	やや浅い体部から、口縁部は湾曲気味に外反。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。	雲母 内外一鈍い橙色	1/8。
13	土師器 碗	口径 12.6 底径 — 器高 —	浅い体部から、口縁部は湾曲気味に外反。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	雲母 内外一橙～鈍い黄 橙色	1/4。
14	土師器 碗	口径 15.6 底径 — 器高 6.8	深い体部から、口縁部は直線的に短く外反。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ。	黒色粒・礫 内外一橙～鈍い橙 色	7/8。
15	土師器 鉢	口径 9.8 底径 — 器高 5.5	深い体部から、口縁部は直線的にやや内傾。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	角閃石 内外一鈍い褐色	4/5。
16	土師器 短頸壺	口径 9.0 底径 — 器高 —	直立気味のやや高い口縁部。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。	黒色粒・礫 内外一橙色	口縁部～体部 2/5。
17	土師器 短頸壺	口径 9.4 底径 — 器高 —	中に弱い稜線をもち、直線的にやや内傾する口縁部。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。	黒色粒・礫・雲母 内外一橙色	口縁部～体部 上位1/4。

V 結 語

前の山古墳の埋葬施設は過去に徹底的な破壊を受け、玄室部分は天井石から根石に至るまでほとんどすべての石材が取り去られた状態であった。副葬遺物としては、石室床面の攪乱中で、わずかにガラス玉と耳環を検出したのみにとどまった。

これに対し、墳丘部では一部に葦石の残存を認め、墳丘第2段の平坦面に樹立されていた埴輪も多くは原位置をとどめないものの一定の量が出土した。とくに石室前底部の左右に配置されていた3点の盾持人物埴輪は、頭部や表情の特異な造形が注目される。また、石室前庭部では須恵器プラスチック形長頸壺、土師器環などが認められ、追葬を含めた埋葬もしくは追加的祭祀に伴う土器供献行為の一端を知ることができる。さらに、墳丘盛土下旧表土面の精査過程では、墳丘構築前の祭祀行為に伴うと考えられる土師器環・短頸壺の一括資料を検出している。本節では、これらの資料について取り上げ、以下に若干の検討を加えたい。

(1) 盾持人物埴輪について

前の山古墳出土の盾持人物埴輪は大きく口を開けて笑う表情以外に、1) 中空の大型管状頭頂部、2) 管状頭頂部から額部に下がる三叉状の緒、3) 円形の眼孔、4) 大型の鷲鼻、5) 椀状を呈する大型の耳、6) 「V」字状の口、7) 歯をむき出す表現、8) シャくれ顎など頭部から顔面部にかけてきわめて特異な造形となっている。また、9) 盾上縁の粘土帯、10) 台部最下端をめぐる突帯なども前の山古墳の盾持人物埴輪の特徴に加えられる。同様の特徴を備えた盾持人物埴輪が、既存資料に認められないことから、本例の造形上の特異性が強調されがちな面もあるが、個々の属性については各地出土の資料のうちに見出すことができる。

まず、笑う表情の盾持人物埴輪は、東京国立博物館所蔵群馬県新田郡藪塚本町出土例、同じく東京国立博物館所蔵茨城県高萩市高戸出土例、東京大学人類学教室所蔵茨城県高萩市行人塚古墳出土例などが知られる。とくに茨城県高萩市高戸出土例は目と口を大きく切り抜き、前の山古墳例に最も近い。中空の大型管状頭頂部は、群馬県高崎市綿貫観音山古墳出土の「盾持人(1714)」に見られる。この資料は頭部のみが残存で他と接合せず、以下の部分の造形的特徴は明らかではないが、後述のように共伴の盾持人物埴輪の顔面造形には特異な形状のものが多い。

管状頭頂部から額部に下がる三叉状の緒は、東京国立博物館所蔵群馬県太田市由良出土例に類似の表現を認める。粘土紐ではなく赤色塗彩によることから、緒の表現ではなく額部への彩色を表したとする理解も可能である。なお、この太田市由良出土例の額部赤色塗彩には「V」字状の描き込みは存在しないようで、盾持人物埴輪15のように緒を粘土紐で立体的に表現し、表面に連続する「V」字状の線刻を加え、さらに後頭部側にも1条の緒を垂下するという事例は他に例を知らない。

盾持人物埴輪16に見るような円形の眼孔は、他形式の人物埴輪に散見するものの盾持人物埴輪には確実な例が見られない。完存しないが群馬県高崎市綿貫観音山古墳出土の「盾持人(1721)」は目頭の部分が大きく円形に切り抜かれ類似の形状を示す可能性がある。

大型の鷲鼻は、同一形状の事例を認めないが、先の群馬県高崎市綿貫観音山古墳出土の「盾持人

(1721)の鼻が板状の大型品で、下面にヘラ状工具の先端を用いた刺突によって鼻孔を表現する点が共通する。ただし、「盾持ち人(1721)」の鼻はヘラ状工具による渦巻き文や弧線文が加えられており、共伴の盾持人物埴輪の中でもやや異質な存在である。

椀状を呈する大耳は、千葉県山武郡横芝町殿塚古墳出土例が酷似している。殿塚古墳出土例は冠と頸飾の表現があり残存の範囲には盾の表現を認めないことから、盾持人物埴輪の範疇にはない可能性もあるが、耳の正面形、湾曲の度合いとともに中央に小型の円孔を配することも共通している。

盾持人物埴輪17のような「V」字状の口は、他形式の人物を含め事例を確認できない。

盾持人物埴輪15・17の口の切開面には上下に3対のわずかな窪みを認め、本来存在した何らかの部品が脱落した痕跡と推定される。確証はないものの石などを嵌め込み、歯を剥き出して笑う表情を表した可能性が高いと考える。群馬県高崎市山名原口1号墳など少数の類例が知られる。

しゃくれた顎は群馬県高崎市綿貫観音山古墳出土「盾持ち人(1713)」などいくつかの事例が存在するが、前の山古墳例ほど極端な表現は存在しないようである。

上縁に粘土帯をもつ盾持人物埴輪は複数の事例を見い出せるが、埼玉県大里郡江南町権現坂埴輪窯跡粘土採掘坑出土例、東京国立博物館所蔵茨城県筑波郡谷田部町塚原出土例など多くは幅広のもので、前の山古墳と同様のやや細身で突帯状を呈する粘土帯は埼玉県立博物館所蔵埼玉県児玉郡美里町十条出土例が最も近似する。

台部最下端の突帯は他の盾持人物埴輪にほとんど例を見ない。先出の東京国立博物館所蔵群馬県新田郡藪塚本町出土例では、最下端からやや上に離れた位置に1条の突帯が存在する。前の山古墳出土の盾持人物埴輪15・16のように底部突帯とよぶべきものは、むしろ器財埴輪の台部や一部の朝顔形埴輪などとの共通性が注目される。

(2) 前庭部出土土器

土師器坏2点の型式はともに真間式に該当するもので、年代は7世紀後半にまで降下するものである。6世紀末葉に想定される古墳築造年代との時間差は大きい、追葬ないしは追加的祭祀行為に伴って前庭部に置いた土器の一部であろう。須恵器フラスコ形長頸壺、須恵器横瓶も前庭部への祭祀行為に伴うものと推測されるが、年代は7世紀初頭から前半と推定され、土師器坏に比べやや古く古墳築造の時期に近い。6世紀末葉の初葬以後、複数回にわたる追葬、追加的祭祀が実施されたことが想定される。

(3) 墳丘下出土土器

墳丘下出土土器は墳丘盛土直下の旧表土上面において一括で検出していることから、時間的に先行する遺構に伴うものではなく、旧表土層整地後、墳丘盛土工開始前に移動してきた可能性が高い。小型の土師器坏蓋模倣坏を中心に土師器短頸壺2点加わる組成で、器種を限定して用いている。完形品はなくすべて小片となっていたが、接合の結果、ほぼ完全に復原が可能な個体と、一部が残存するのみの個体が混在していた。以上のことから、これらの墳丘下出土土師器は、その場で破砕・遺棄されたものとはわかに断定できないものの、墳丘築造に先立つ何らかの祭祀行為に関係して配置もしくは投棄されたものと想定できよう。

【引用・参考文献】

- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成畿内編』山川出版社 東京 pp.24-26.
- 橋本博文・佐々木幹雄ほか 1980 「有勝寺北裏遺跡」有勝寺北裏遺跡調査会 東京.
- 恋河内昭彦 1996 「第V章まとめ」『辻堂遺跡Ⅰ—県営水田農業確立排水対策特別事業（やほり川地区）に伴う辻堂遺跡B地点発掘調査報告書—』見玉町文化財調査報告書第19集 見玉町教育委員会 見玉郡見玉町 pp.63-90.
- 松本 完 2002 「大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第2次）・北堀前山古墳群（第2・3次）発掘調査報告書—新幹線本庄新駅（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅰ—」本庄市遺跡調査会報告第6集 本庄市遺跡調査会 本庄.
- 美里町 1986 「第二章第四節 古墳時代」『美里町史』通史編 見玉郡美里町 pp.135-191.
- 中村倉司 1999 「埼玉県における5世紀代の土器—和泉式土器の行方—」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 藤沢 pp.91-118.
- 並木 隆 1976 「7 本庄市旭古墳群の調査」『第9回遺跡発掘報告会発表要旨』埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会 浦和 pp.8-9.
- 南毛古墳文化研究会 2001 「本庄市域における古式古墳調査の成果と課題」第5回群馬県古墳時代研究会・南毛古墳文化研究会合同検討会資料 本庄.
- 太田博之 1991 「本庄遺跡群発掘調査報告書V—公野塚古墳—」本庄市埋蔵文化財調査報告第19集 本庄市教育委員会 本庄.
- 埼玉県 1982 「下野堂（しものどう）古墳群」『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代 弥生・古墳 浦和 pp.674-677.
- 埼玉県立本庄高等学校考古学部 1975 「いぶき」8・9合併号.
- 坂本和俊 1985 「埼玉県における円筒埴輪編年の諸問題」『埴輪の変遷—その普遍性と地域性—』北武蔵古代文化研究会 pp.63-69.
- 1986 「埼玉における前期古墳の形成」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室 浦和 pp.204-207.
- 埼玉県教育委員会 1994 「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」浦和.
- 菅谷浩之 1976 a 「下野堂遺跡」『本庄市史』資料編 考古資料 本庄市 本庄 pp.59-62.
- 1976 b 「有勝寺北裏埴輪窯跡」『本庄市史』資料編 考古資料 本庄市 本庄 pp.100-103.
- 1976 c 「赤坂埴輪窯跡」『本庄市史』資料編 考古資料 本庄市 本庄 p.103.
- 鈴木徳雄 1983 「第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境」『阿知越遺跡Ⅰ』見玉町文化財調査報告第3集 見玉町教育委員会 見玉郡見玉町 pp.3-6.
- 徳江秀夫ほか 1998 「綿貫観音山古墳Ⅰ—墳丘・埴輪編—」群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第242集 群馬県埋蔵文化財調査事業団 勢多郡北橋村.
- 山川守男・盛敬彰・金子彰男・中村正明・橋本雅夫・松本和弘 1981 「新発見の埴輪窯跡群」『いぶき』12号 埼玉県立本庄高等学校考古学部 本庄 pp.29-40.
- 柳 進 1961 「見玉町八幡山埴輪埴輪窯跡発掘調査報告書」埼玉県立見玉高等学校 見玉郡見玉町.
- 早稲田大学有勝寺北裏遺跡調査会 1979 「埼玉県本庄市前山有勝寺北裏遺跡発掘調査概要」東京.

写 真



前の山古墳A地点
調査時の墳丘



前の山古墳A地点
調査区全景【北から】



前の山古墳A地点
周堀検出状況【西から】

写真 2



前の山古墳 A 地点
周堀検出状況 [東から]



前の山古墳 A 地点
周堀検出状況 [南から]



前の山古墳 A 地点
周堀検出状況 [南から]



前の山古墳B地点
墳丘南西側墓石の露出状況



前の山古墳B地点
墳丘西側墓石の露出状況



前の山古墳B地点
表土除去後の状態

写真 4



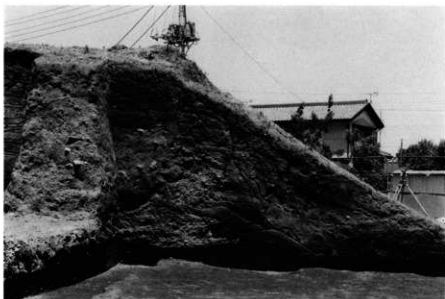
前の山古墳B地点
前庭部・墓石検出状況



前の山古墳B地点
墳丘掘削後の状況



前の山古墳B地点
墳丘西側盛土検出状況



前の山古墳B地点
墳丘東側盛土検出状況



前の山古墳B地点
墳丘北側盛土検出状況



前の山古墳B地点
石室基盤検出状況

写真 6



前の山古墳B地点
厩持人物壇輪16台部検出状況



前の山古墳B地点
厩持人物壇輪16台部検出状況



前の山古墳B地点
厩持人物壇輪15台部検出状況



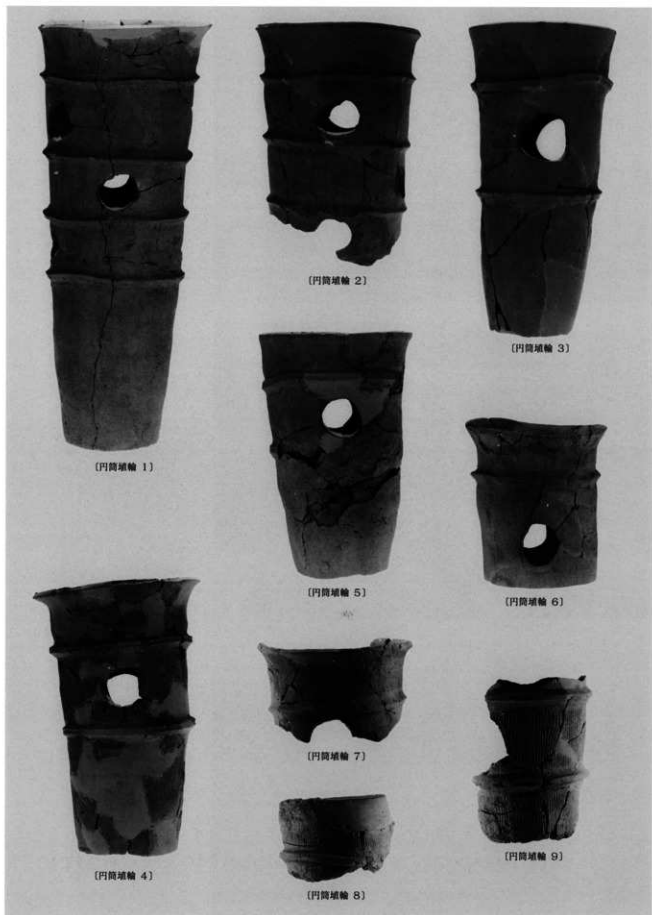
前の山古墳B地点
厩持人物埴輪15頭検出状況



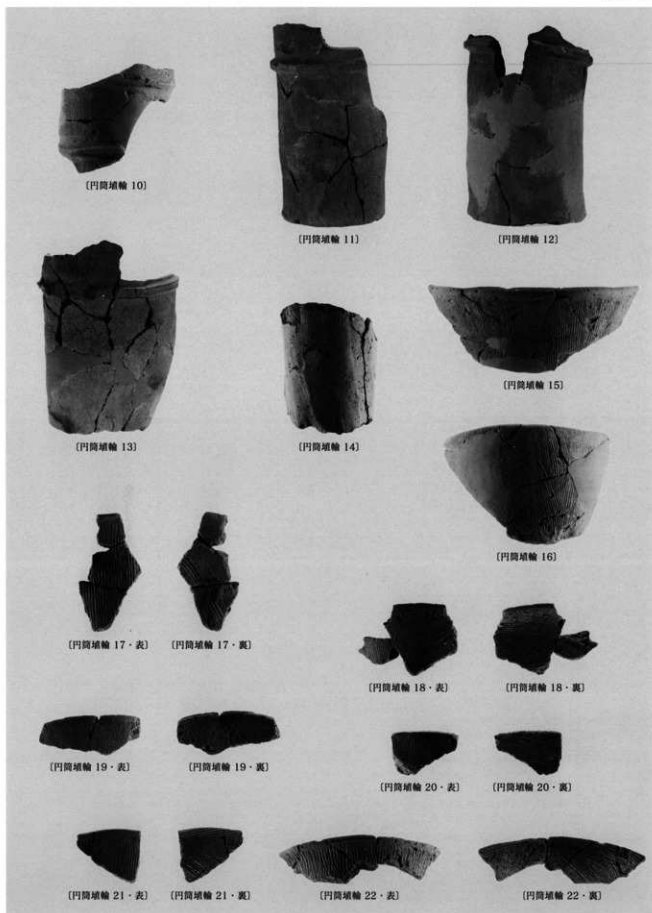
前の山古墳B地点
前底部フラスコ形長頸壺検出状況



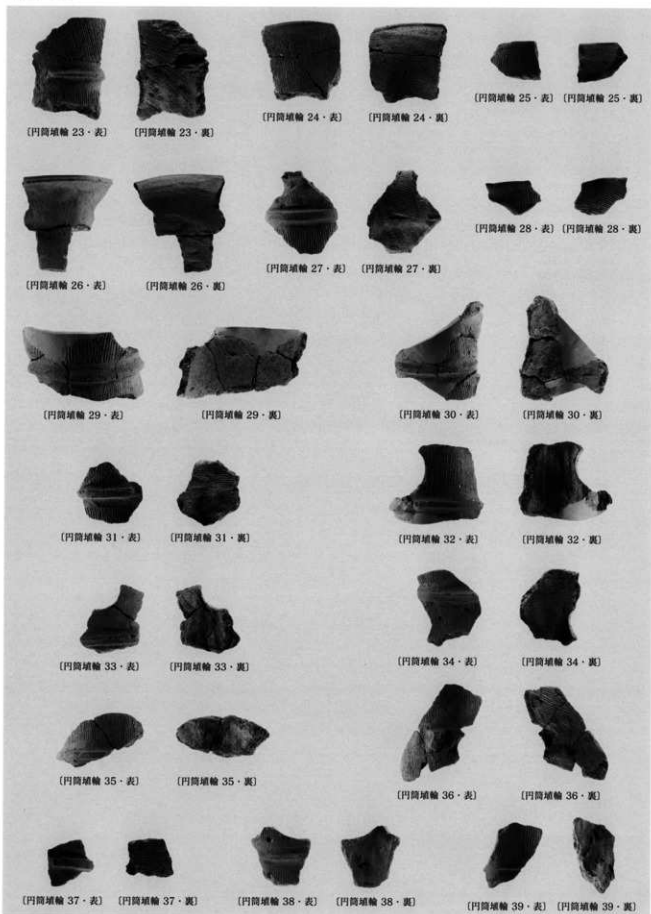
前の山古墳B地点
墳丘下土師器検出状況



円筒埴輪 1 ~ 9



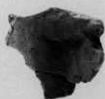
円筒埴輪10~22



円筒埴輪23~39



〔円筒埴輪 40・表〕



〔円筒埴輪 40・裏〕



〔円筒埴輪 41・表〕



〔円筒埴輪 41・裏〕



〔円筒埴輪 42・表〕



〔円筒埴輪 42・裏〕



〔円筒埴輪 43・表〕



〔円筒埴輪 43・裏〕



〔円筒埴輪 44・表〕



〔円筒埴輪 44・裏〕



〔円筒埴輪 45・表〕



〔円筒埴輪 45・裏〕



〔円筒埴輪 46・表〕



〔円筒埴輪 46・裏〕



〔円筒埴輪 47・表〕



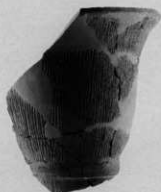
〔円筒埴輪 47・裏〕



〔朝顔形埴輪 50〕



〔朝顔形埴輪 48〕



〔朝顔形埴輪 49〕

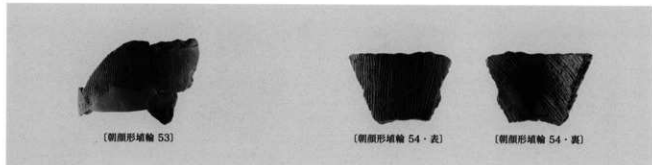


〔朝顔形埴輪 51〕

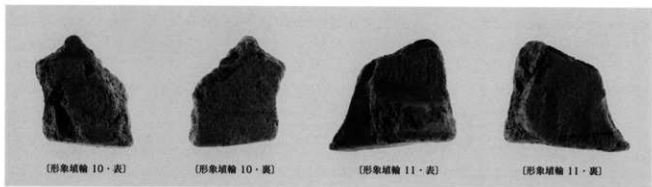


〔朝顔形埴輪 52〕

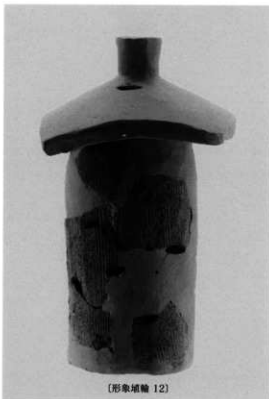
写真 12



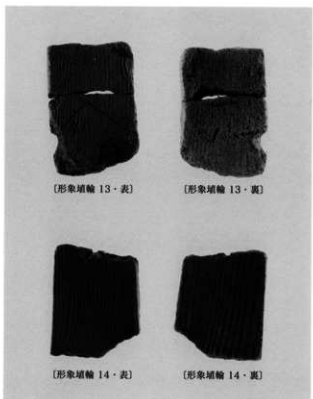
朝顔形埴輪53・54



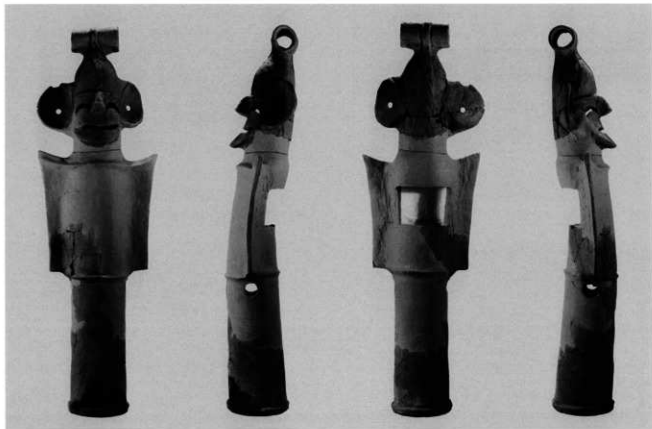
家形埴輪10・11



蓋形埴輪12



大刀形埴輪13・14



盾持人物埴輪15



盾持人物埴輪15・頭部【正面】



盾持人物埴輪15・頭部【左側面】



盾持人物埴輪15・頭部【後面】



盾持人物埴輪15・頭部【右側面】

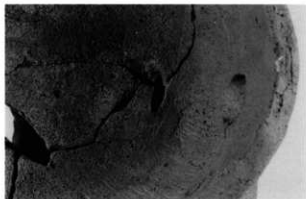
写真 14



盾持人物埴輪15・緒【後面】



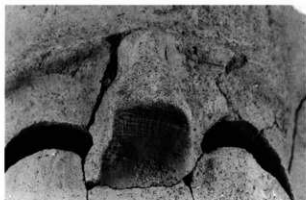
盾持人物埴輪15・顔【側面】



盾持人物埴輪15・耳孔



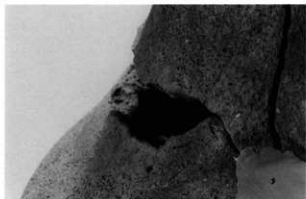
盾持人物埴輪15・鼻【側面】



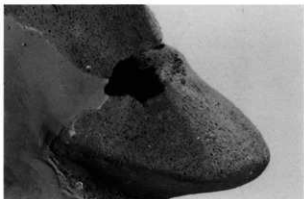
盾持人物埴輪15・鼻【下面】



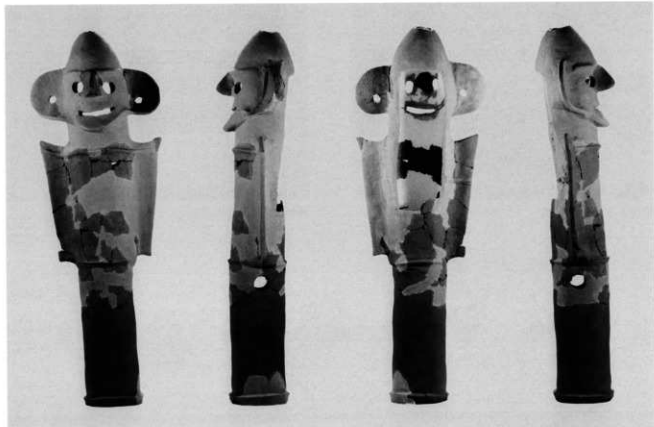
盾持人物埴輪15・口【正面】



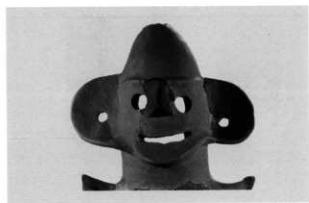
盾持人物埴輪15・口【側面】



盾持人物埴輪15・顎



盾持人物埴輪16



盾持人物埴輪16・顔



盾持人物埴輪16・鼻

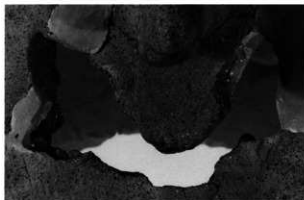


盾持人物埴輪17

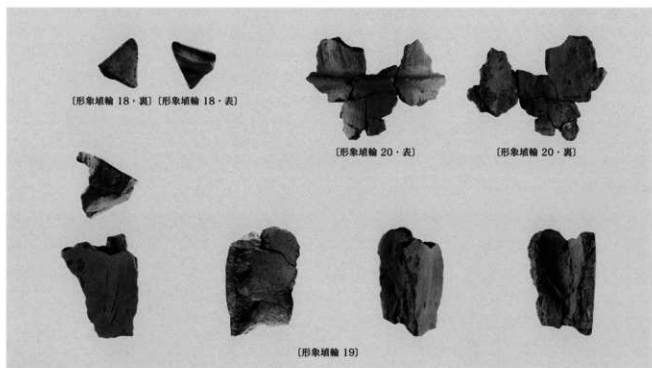
写真 16



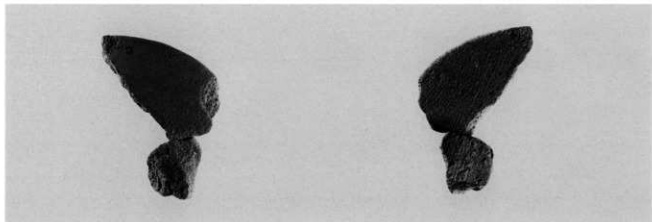
盾持人物埴輪17・鼻



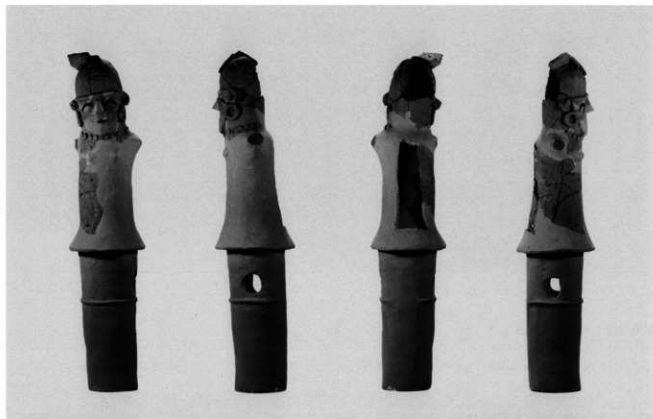
盾持人物埴輪17・口



盾持人物埴輪18~20



女子人物埴輪21・髻



女子人物埴輪21



女子人物埴輪21・耳玉、耳環【右側面】



女子人物埴輪21・耳玉、耳環【左側面】



女子人物埴輪21・櫛



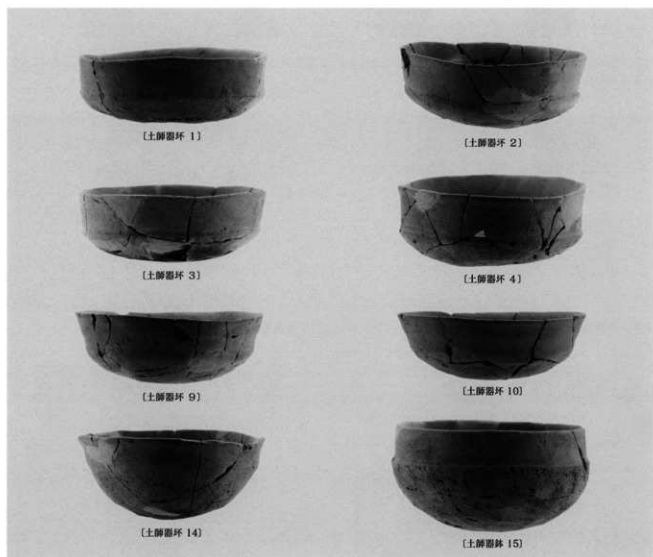
女子人物埴輪21・頸玉



〔須恵器フラスコ形長頸壺 3〕

〔須恵器横瓶 4〕

前庭部出土土器3・4



〔土師器坏 1〕

〔土師器坏 2〕

〔土師器坏 3〕

〔土師器坏 4〕

〔土師器坏 9〕

〔土師器坏 10〕

〔土師器坏 14〕

〔土師器鉢 15〕

墳丘下出土土器1～4・9・10・14・15

報告書抄録

ふりがな	あさひ・おじまこふんぐん まえ やまこふん							
書名	旭小島古墳群 前の山古墳							
副書名	小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書1							
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	太田博之							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会 電話0495-25-1186							
発行年月日	西暦 2001 (平成13) 年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
旭・小島古墳群 前の山古墳	埼玉県本庄市 小島3丁目7番 1.674他	112119	135	36°14'48"	139°10'19"	1990.05.25～ 1990.06.25 (1次) 1998.11.04～ 2001.01.31 (2次)	964m ²	区画整理
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
旭・小島古墳群 前の山古墳	古墳	古墳時代後期		古墳1		埴輪、土師器		

本庄市埋蔵文化財調査報告 第23集

旭・小島古墳群

一 前の山古墳 一

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 I

平成13年 3月25日 印刷

平成13年 3月31日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄 3丁目 5番 3号

電話 0495-25-1186

印刷／朝日印刷工業株式会社

